

繪本太功記

座本 竹本諏訪太夫

發端

天にかなひし故やらん八百の諸侯従ひて村王を討たんといひしを我未だ天命を知らずとて諸の軍を引具し先づ歸りぬ。

ナホ地實に戰國に大勇を示す亂舞の音高き。内大臣春長公の一構、遠近の諸士大半屬し。登城は櫓の齒を引く如く、フシさも嚴重に見えにけり。地取次の侍罷り出で。阿仰せ付けられし安部の法印只今參著仕ると。地申上ぐれば近習の面々。斯くと取次ぐ間もなく内大臣平の春長。従ふ武士は羽翼の臣眞柴筑前守久吉、武智光秀諸共に、フシ縁際近く座に直る。地久吉下部に打向ひ。地ホ、君にも殊なうお

待ちかね。早く案内申せよと。地いふ間程なく法印安部氏。さすが都の水清く。淀まぬ公家の交りに、フシ衣紋正しく入り

來る。地春長莞爾と打笑み給ひ。阿ホ、法印には大儀々々。其方を召寄せしは餘の儀にあらず。あれなる大庭の蘇鐵。泉州妙國寺にありしを。此安土に植ゑ置く所に。頻りに聲を發し妙國寺へ歸らん。歸せくと震動する事三夜に及ぶ。正し變化の所爲ならん判断。いかにとありければ。地始終を聞き入る内よりも理を考ゆる道々の。胸の算木に眉を皺め。阿ハア、御尤もなる御尋ね某考へ申せしに。草木心なしとは申せども。佛地に育ち朝夕妙經を聞込み。一度枯れし木なれ

ども。元の如く榮えしも法華經の徳ならずや。法力の尊きは御宗旨の有難き所なれば君にも御満足ならん。地急ぎ佛地へ送り還し給はるが。肝要ならんと法印が。水を流せる辯舌は實に晴明の末孫の器量フシ顯はれ見えにける。地色血氣の大將道理に迫り。阿春長が手に入れし蘇鐵返すべき謂なし暫く妙國寺へ預ける旨。使者を以て申遣はし心が心に叶はざる法華の族。いはれざる宗論を好み。上を恐れざる無禮の段々。牢獄へ押込め置いたり。地其上今日捕へ置きたる普天一人。身が目通りへ引出せよ。阿安部氏には休息あつて然るべからん。久吉には鹿略なき様もてなすべし。地はつと領掌式禮目馳。眞柴に隨ひ法印はオクリ次のへ一間へフシ立つて行く。程もあらせず下部ども。普天坊を高手小手庭上に引据ゆれば。阿光秀は普天に向ひ。阿ヤア貴僧。かゝる縛め

に連ふ事も。法義故とはいひながら。獄の苦しみ察しやる。君にもこれに御座ましませ。退つて出牢の御願ひナ。サ致されてよからんと。地普天を庇ふ明智が詞。尾田殿くわつと怒りの面。詞ヤア某

が詞も出さぬ内。出牢の願ひせよとは。いらざる汝が最良の沙汰。控へて居よと居丈高。ヤイ。根ぐさり坊主よつく聞け。此度妙國寺の庭木の蘇鐵。某所望し此安土に植ゑ置きたる所。無性に妙國寺へ歸らんと吠ゆる。喧しきによつて。暫くかの地に預ける間。佛木たりとも春長所望の上は。再び返すにあらず。汝等を番人に申付くる間。其旨きつと心得られよと。

冥途の高祖へ申し達せよ。不承知ならば直ぐ様に。普天を以て冥途より返答あるべし。地おのれも法華の妙を知らば。二度此土へ立歸り。詞某に詞をかはせよ。最早左様なる法力はあるまい。一時

も早く使を急がせよ。早く。地早くと不敵の春長。重惡毒の權威の仰せ。怵へし普天坊。すつと寄つて齒嚙をなし。詞ヤアぬかしたり嚙つたり。汝が宗門でありながら。高祖を輕んじ奉り。惡口雜言報ひ忽ち遠かるまじ。愚僧只今命を滅するも。汝が使に行くにあらず。閻魔の廳へ赴きおのれが惡逆訴への爲に此世を去る。見よく頓て火の車を持たせ。拙者

の門途急ぎたし。イザ光秀殿介錯と。地罵る普天を光秀がはつたとにらみ。詞ヤア我が君に詞をかへし。惡言を吐く手間で。なぜ助命の願ひは致さぬ。恐れながら我が君にも御怒りを鎮められ。御助命の程偏に願ひ奉る。元來勇猛盛にして。良もすれば靈場佛地を破却し給ふ事。君の一失山門の衆徒等も。急難を遁れんと

一七日の加持祈禱。惡逆の勇將と。世の

人口默しがたし。只仁惠の御計らひ偏に願ひ奉ると。地事を分けたる光秀が。詞に春長突つ立上り黙れ光秀。詞我が惡逆とは憎くき過言赦されずと。地拳振上げ明智が頭りうくく。打据ゑ給へど手

向ひの。ならぬも主命ハツはつと。あやまり入つたる無念の涙。普天なほも怒りの顔色。詞エ、惡鬼魔王といふは汝が事。君あつて臣。臣あつて君たる事を知らず。情なくも大國の。主たる光秀殿を。童劣りにうち打擲。天罰佛罰一時に報ひ。墮獄にくだしてくれんすと。地怒り

現あるかと身もよだつ。ヤアく物な言はせせ早くも國境へ引立てよと。御下知恐れ家來ども。はつとばかりに引く繩のやがて恨みを知らさんと。題目の聲一心に。佛敵春長赦さじと。詞は正に本能寺。御法の庭の露となす。佛の報い宗門の威

力の。程こそ 三

六月朔日の段

扱も其後。地天正十年六月上旬の事か
よ。内大臣平の春長。東北に猛威を振り押
して都に上洛ある。御嫡男城之助春忠二
條の御所に居をしめ給ひ。天奏御容を入
れ給へば。饗應の役人は武智日向守光秀。
森の蘭丸始めとし。譜代の良臣古老の諸
士ヲシ列を正して相詰むる。地色院の御
所の内勅。浪花中納言兼冬仰せ出さるゝ
は。同往時應仁の亂れより。諸國の逆
賊王威を輕んじ。都の内へ軍馬を引入
れ。玉座近く馬跡に穢し敷慮穢かならざ
りしに。幸ひ春長大志を抱き。帝都を無
事に治むる條。主上御感淺からず。其功
を賞し給ひ。嫡子城之助春忠を從三位に
叙し左中將に任ぜらる院の内勅。地斯く
の通りとありければ。春長はつと平伏あ

りコハ有難き勅命。固不肖の某。何ぞ一
臂の力に及ばん。三好を始め逆徒原。四
方に退散いたせしも君の遺徳。數ならぬ
悴春忠身に餘つたる官位昇進。天恩謝す
るに詞なしと。地勅答あれば兼冬卿。や
や満足の御氣色。春長重ねて。軍務に暇
なき某。心ばかりの御饗應。鄙びたる。觀
世能御上覽も時の興。イザ奥殿へとあり
ければ袖かき合せ兼冬卿。武智が案内に
しづくと。オクリ奥の間ヲシして入り
給ふ。地色春長跡を見送つて。蘭丸これへ
と近く召され。同汝も豫て知る通り。無
二の忠士と思ひの外。心得難き光秀が心
中。彼が心を探らん爲。いつぞや寺に於
て諸侯の見る前。恥辱をあたへ恥しむれ
ど。面に怒りを顯はさず。無念を忍ぶ彼
が胸中。猶以て不審の一つ。其儘にさし
置かば。虎の子を飼ふに同し。逆心の企
てあるや。地虚實を探り試し見よと。仰

せに蘭丸さん候。同武智が行跡聊か不審
に存ずる折から。割符を合す君の御心。
思ひ合する彼が俗性。頭上に喜怒哀楽ある
者は。主人に崇ると異人の禁め。もし逆
心に極まらば。討つて棄てんに手間際い
らず。奥へ踏込み引捉へ。ヤレ鹿忽なり
蘭丸。實否も糺さず荒立てなば。却つて
僻事出来せん。事によそへて。ナ。合點
か。ハア、畏り奉る。必ず油断いたすな
と。地膝合して春長公ヲシ帳臺に深く入
り給ふ。地蘭丸は只一人。兩手を組んで
思案顔。ホヲシ工夫を凝す折も折奥は。亂
舞の打囃子。二番三番ワキ能も。終りと
見えて配膳の。ヲシ時刻も移る。巳の上
刻。武智が一子十次郎。オクリ故實を。守
る饗應司。配膳のかけ盤山海の珍珠美を
盡し。ヲシ目八分に捧げ来る。蘭丸見る
より。同コレサ十次郎先づ待たれよ。饗
應の役目は。お手前の親父。光秀殿と此

蘭丸。兩人立合ひ申合せもあるべきを。

自分一人の取計らひ。この蘭丸は吞込め

ぬ。膳部の次第は。如何でござる。ハア、

御料理は板元奉行中井半左衛門。七五三

の獻立。ナニ七五三。ハテナア。何にも

せよ。相役の某に。一應のこたへもなく。

氣儘なる致し方。近頃以て不躰千萬。此

分では差措かれず。光秀殿へ直應對。地

イデ役所へと駈行く向ふ。襖ぐわりりと

出で来る武智。蘭丸傍へぐつと詰寄り。

目様子残らず。聞かれしな。武士は禮儀を

表とするに。この蘭丸を踏付けし仕方。

如何なる趣意か言へ聞かん。返答次第手

は見せぬときつば廻せばハ、ハ、ハ、コハ

仰々しや蘭丸。さすが若氣の一枚。何故貴

殿を侮り申さん。最早御膳の時刻故。役

目大事と勤むる光秀。黙り召され。齋應

の役。貴殿拙者に相勤めよとは主人の云

付け。主命をもどき。自分の氣儘にせよ

らるゝは。エ、聞えた。こりや何か。拙者

を役に立たずと思召すか。但し又智者

と呼ばれし武智殿。人を見下す高慢か。

イヤハヤ。人も知つたる其許の素性。何

か浪人の寄る邊なく。所々方々をうろた

へ廻り。北國に於て詮方なく。糧に盡き

たる身のせつなさ。土民どもの小悴を集

め。手跡指南の禮物で。命をつなぐ寺子

屋のお師匠様。ハアアまだある。日外。

江州佐々木征伐の折から。木下と先手を

争ひ。箕作和田山時限の合戦。久吉に仕

負けても。恥を恥とも思はぬ其許。何と。

さうではござらぬかと。地心に思はぬ傍

若無人。さしもの光秀くわつとせき上

げ。イヤア物に狂ふか蘭丸。大切の場所

と事を慎み。いはせて置けば法外千萬。

今一言いつて見よ。舌の根を切下げん。

ヲ、ならば手柄に切つて見よ。ヲ、切つ

て見せう。サア。サア。サアと。地兩方

が互に詰寄り。既に、フシうよと見

えたる所。地襖あらはに春長飛びかゝつ

て光秀が。袴がみ揃んでどうど捻付け。

何やをれ光秀。凡そ武家の格式は。故實

を以て式法を用ゆる。過ぎたるは猶及ば

ざるに若かじとは。古の詞。院の内使も

重けれど。皆それんの例法あり中納言

殿齋應の膳部。金銀の瓶器を用ひ。七寶

を芥の如く鏝め。法外奔走。此後。主上

仙洞の御幸には。何を以てか齋應に叶は

んや。其上蘭丸が申すは我が詞も同然な

るに。異變致す慮外者。頬打て蘭丸。ハ

ア。早く打て。ハア。御上意なり

と蘭丸が。地腰の鐵扇振上げて。眉間眞

甲つゞけ打ち。喰入る要に血は瀧津瀬。

これはと駈寄る十次郎膝にかためて引敷

く光秀。流るゝ血汐諸共に眼血ばしる。

フシ。無念の顔色。地春長つくづく打守

り。何いかに光秀。今蘭丸が手を以て春

長が折檻。口惜しうは思はぬかと。地底意を探る大將の。詞に光秀居直りて。コハ仰せとも覺えず數ならねども武智光秀。君に捧げし我が命骨は挫がれ身はずたゝになるとても。大恩ある御主人をお恨み申さん様はなし。さはさりながら世の人口。春長こそ鬼の再來。情を知らぬ大將と。地獄りを残し給はん事。末代までお家の瑕瑾。舊惡を憎む御性質。諸士の恨みは小車の終に御身に報ふといふ。御心の付かざるはヘエ、淺ましや悲しやなア。御心を願へされあつばれ仁義の大將と。呼ばれ給はれ我が君と。或は怒り。或は歎き。五臟をスエテ絞る。血の涙。思ひは千々に十次郎父の心を察しやり。齒を喰ひしる忍び泣き。フシ心ぞ思ひやられたり。地色金言耳に逆立つ大將。猶も怒りの聲荒らか。阿ヤ言はれぬ諫言。推參至極。目通り叶はぬ立つて失せ

う。ソレ〱蘭丸。武智光秀親子の者。門外へ引出させ。早く〱と。地烈しき下知。はつと領掌蘭丸が。猶豫は如何にときめ付けられ。無念重なる光秀が。我が子をフシ引立て出でて行く。底意は誰かしら浪の。萬里に羽打つ大鵬や。面目涙十次郎身はしよげ鳥の片羽がひ。父の心はしらにぎて。神も佛もなき世かと身を詫ちたる忍び音の。胸は暗闇五月。聞せん方。涙諸共に御門の外へと三度出でて行く。地フシ名にし負ふ。花の都を隣りして。時に近江の本城を跡に見なして今爰に。假の舎の上屋敷千本通りに一構。日向守光秀が。出仕の留守は操の方。地地。夫子の武運長久を。神に祈りをかけまくも。手づから備ふる神酒供物。殊勝に見えて襪はづれ。フシさすがは武家の奥床し。折から次の襪を開き。出で来る武士は武士武智が組下九野豊後守。年も

五十の分別盛り。操が前に兩手をつき。訓先づて今日は。林鐘の初日。大内にも氷室の節會。殊更太守光秀公。大公儀より饗應司の大役仰付けられ。御家の眉目我々まで大慶。フシ至極と述べければ。地操の方取りあへず。訓夫光秀殿。十次郎諸共未明よりの御登城。殊に大事は今日のお役目。常々短氣な春長様。生れ付いた夫の一徹。地何の障りもない様と案じるは女の常。悲しい時の神佛と手づからのお供物。訓是は〱。イヤもう萬事抜目なき光秀公。追付け吉左右上首尾と。フシ挨拶取々なる所へ。殿様の御下城と。知らせの聲に妻操。我が子の音諸共豊後守も座を改め。待つ間程なく武智日向守光秀。常に變りし其面色。疊ざはりも荒々しく。不興の體に立歸れば。跡に随ひ十次郎。フシしを〱として座に直る。地色夫の顔色額の疵。心ならず

と操の方。光秀の傍近く申し我夫。わがうし。討い
つにないお頼持ち。お氣もじ悪うはござ
りませぬか。お怪我でもなされたか。ど
うやら氣がかり胸騒ぎ。地心がかりと尋
ぬれど。とかう答へませぬ夫。十次郎顔
振上げ。爾今日二條の館にて饗應司を勤
むる所。日頃不和なる森の蘭丸。我々へ
様々の悪口雜言。そのみならず春長
様。もつての外の御怒りにて。蘭丸に仰
付けられ。アレあの通り。父上の眉間へ
疵の付く程に。殿中での打ち打。擽目通
りへは叶はぬと。警固の武士に追立てら
れ。無念ながらもおめくくと。顔押拭ひ
歸りしと。地いひつゝこぼす口惜し涙。
聞くより妻はハアはつと。胸を貫く釘
鉋。豊後も俱に拳を握り。スエテ咬牙齒
ぎしみ無念の涙。地色様子立聞く四王
天。物をもいはず表の方。駈出す裾をし
つかと止め。爾事を急いたる汝が顔色。

仔細ぞあらんと言はせも立てず。ヤア愚
かなり豊後守。主人へ恥辱を與へし。素丁
稚の蘭丸め素頭引抜き立歸る。妨げすな
と振解き。地行かんとするを猶も引止
め。爾イ、ヤ其憤りは應忽々々。汝が無
骨は主人の誤り。却てお家の仇となら
ん。先づ待たれよと支ゆる九野。地シヤ
面倒なと勇氣の田島。放せ放さぬ。フシ
カ、二人が争ひ。光秀聲かけヤレ待て兩
人。爾身が詞も出さぬ内。立騒いで見苦
しい靜まれやつと制すれば。地物に怵へ
ぬ田島頭。武智が前にぐつと詰めかけ。
爾たとへ誤りあるにもせよ。丹州近江兩
國の太守。殿中での打擽は。我々も俱に
恥辱。頬恥を曝さんより。蘭丸めを討つ
て棄て。叶はぬ時は生害と。覺悟極めし
四王天。ナ、何故お止めなさるゝな。ヤ
ア愚かく。光秀を打つたるは私ならぬ
生命。スリヤ蘭丸に遺恨はない。元來短

慮の御大將。心に叶へば飽くまで寵愛。又
叶はねば打ち打擽。たとへ命を召さるゝ
とも。君に捧げし我が一命。ちつとも惜
まず厭はぬ某。我が存念も知らずして。
息筋はつて尾籠の振舞ひ。靜まれ退され
と睨め付くる。地道理にさすが荒者が。
行くも行かれず立つたり居たり。フシ勇氣
も。たゆみ猶豫ふ中。爾御上使の御入り
と下部が聲。地光秀不審の眉を皺め。爾
ハテ心得ず。思ひがけなき上使とは。何
にもせよ。女房悴は次へ立て。早くく
とフシ追立てやり。地色威儀繕うて出で
迎ふ。案内につれてのつさく。役目を
功に肩肘張り。頬も眞赤い赤山與三兵衛
上座に。むんずと押直り。爾上意の趣き
餘の儀にあらず。先達つて眞柴久吉。郡
三家を退治の爲中國へ馳せ向ふ。急ぎ光
秀加勢として。西國へ下り久吉の幕下に
屬し。戦功を勳むべし。其功勞によつて。

出雲石見の兩國賜はるべき間。今まで下し給はる丹州近江二ヶ國は召上げらるゝ旨。城代へ申渡し急ぎ城を明渡すべしとの嚴命なりと。地いふに人々二度びつくり。主従顔を見合せて暫し。フシ詞も口籠る。地物に動ぜぬ光秀は。禮儀正しく上使に向ひ。四ハア、台命の趣き委細承知仕る。すぐさまこれより西國下向。城明渡し用の意萬端。家中の諸士へも申し渡さん。ホ、早速の領掌神妙々々。一刻の延引は一刻の不忠となる。出陣やら宿替やら。がらくた道具片付けて。はや城を渡し召され。役目はこれ迄おさらばと。地情體目體取混ぜて。眞綿に針の青墨。フシ蹴立てゝこそは立歸る。地一徹短氣の田島の頭。阿コレサ御主人。今赤山が上意の次第。前後揃はぬ詞のはしく。西國加勢と披露して。實は御身を改易し。自滅をさせんず春長が姦計。

良禽は木を見て栖む。不仁非道の尾田春長。義理も忠義もこれ限り。西伯姫昌は股を討ち。つひに天下を治めし例。破鏡再び照さぬ道理。今目前に類はれたり。今隨臣の空虚を考へ。一時に尾田を討ち亡し。天下に霸たる功を上げ。名を千歳に留めんは。サ、ハ、ハ、ハ、いかに〜と急なたに立聞く操。襖あらはに走り出で。夫の傍へ差寄つて。阿忠義一途の田島の頭。さら〜無理とは思はねど。地勿體ない我が君を殺して四海を奪はうとは。聞くもうるさい穢らはしい。罪は目前美濃尾張主を殺して一日も。安穩ならぬ天の責めお年寄られし母御様。いとし可愛い子供まで俱に悪名とらするが。それが本意か情ない。妻子不便と思すなら。御身全う月と日の。曇らぬ鏡武士の。操を立てゝ給はれと。わつゝ口説いつ理をせ

めて。夫を思ふ真心の思ひは千筋百筋の字綴を亂す憂き涙。フシ止めかねてぞ見えにける。地元來仁義の豊後守。光秀に打向ひ。阿文武二道の我が君にお謀め申すは憚りなれども。和漢の書籍に記せし通り。反逆謀反の輩が本意を達せし例はなし。世に秀でたる光秀公高木風の俗語にひとしく。皆倭人のなす所。時節を待つて誤りなき。申し開きの手段はさまざま。上使に立ちし赤山と君が五音を考ふるに。水火既濟の卦に當つて。西施國を傾くる不吉の占。一旦勝利ありと雖も。日あらずして災ひ生じ。終に全からざる前表たゞ幾重にも思ひ止まり。ステ下されよと。事を分けたる謀めの詞。地いへども兎角の返答なく。地ム、心なき人は何とも言はゞ言へ。身をも惜しまじ名をも惜しませず。スリヤいよ〜御謀反の思し立ちでござるよなと。地言はせも

あへず翌後が首討つてかたむる。ツシ謀反の首途。詞ハ、適れ〜。此上は軍の手配。ホ、いで出陣の川意をせよ。ハア。所存の程こそ三軍

同日の段

阿何と三助替くて堪へられぬぢやないかい。ヲ、サ此下郎には何がなる。朝疾くから手桶の切り水。暮方も又此様に汗水になつての掃き掃除。俺も後の世には大将に生れて来いと思ふが。どうであらうなア。されば。此本能寺を假殿にしてござる春長様は。前生は鬼だといへば。奴が大将にならぬ事もあるまいわさ。地といへば傍から珍内が。詞ハテ惣二人ながら何をいふぞい。死んでの先は片便り。奴から大将に生きながらなられた眞柴殿。それを知りつゝ、ほんにやれ〜。来芝の事は由男にして。山村程今をた

め。里町者ぢやといはるゝ市紅が肝心だと。地どつと笑ひの。ツシ折こそあれ。ア、コリヤ〜あれに見ゆる御先供。南無三春思様の御入りだと。地猫に鼠の奴ども。ツシ己が部屋へと逃げて入る。地程なく近付く銃乗物。數多の武士が前後を圍ひ。築地御門に昇掘ゆれば。斯くと知らせに森の蘭丸。禮儀正しく出で向ひ。詞阿野の御局御苦勞に存じ奉ると。地詞の内に乗物の。戸を開かせて阿野の局。三法師君を抱きまゐらせ。しづ〜と立出で。詞春忠様の御名代と此若の御入り故。祖父君春長公より御迎ひとして。自らが守りまして参りに。殊なう御機嫌もよろしく。お嬉しう存じ。地ますと。ツシのたまひければ。詞ホ、それは一段さぞ祖父君にもお待ちかね。地いささせ給へと蘭丸が。案内につれて付き〜も門内さして。三軍へ入りにけり

高岡鹿の普曇の昔もかれ〜の契り。あらよしなや。形見の屬より〜。猶裏衣あるものは。人心なりけるぞや。あふぎとは空言やあはでぞ戀はそふものを〜。ナホス局が一曲出来た〜。悴春忠が名代孫殿へ御馳走に。何と面白い。サ、つげ。地つげと大盃。はつと心得しのおが酌。詞蘭丸へさす所なれども。阿野の局が舞の一手。勞を謝する其爲に局へ盃さし申す。是は〜不束なる一奏。地御意に叶うて此上もなき身の冥加と。いひつゝ局は御盃。少し引受け差置けば。春長公盃に入り。詞ナニ蘭丸局が問を仕れと。地重き御説も詔ひなく。詞コハ仰せに候へども。一滴も及ばぬ。此儀は偏に御高免を。ハテサテ飲まぬ所を飲まずが興。着は汝が望み次第。すりや御着を下されうとな。ホ、六十餘州を手握る此春長。サ、何なりとも望め望

め。ハア然らば何とぞ此蘭丸に。軍勢を四五千ばかり下し給はらば有難からんと相述べれば。ム、心得ぬ汝が望みもし軍勢を與へなば。さん候丹州龜山へ押寄せ。只一戦に光秀が首討取つて。君の災ひを避け申さん。成程尤もなる願ひなれども。いらざる心配無用々々。左様な事に骨折らずと。早く一盞を傾けて。暑さを凌ぐが身の養生。鷹飛び立つばかり有明の。夜驚となき楽しみ。ナホス朝榮花にも榮耀にも此春長には及ばぬ。我が君の御説には候へども。安土の無念を散ぜんと一度は謀反の旗を上げ。窮鼠却て御身の大事。アさすがは若氣。北國には柴田勝家。西國には眞柴久吉。龍に翼の尾田春長。君の御説はさる事ながら。蘭丸殿の詞の如く油斷大敵。ハテサテ局迄が同じ様に。いらざる此場の長腔議。御客人がさぞふら〜眠り。身もほつと

退屈。地イデ一睡の夢の間の。契りはいざと戯れて。フシカ、座を立ち給へば阿野の局。若君誘ひしづ〜と。フシ帳臺。深く入り給ふ。地跡にうつとり蘭丸が。心一つに取つ置いつ。地思ひは同じ女氣の。人目しのぶが寄添ひて。申し蘭丸様。もう何時でござりませうなア。これはしのお殿。そもじはまだ奥へ行かすか。アイ。ハテさてそれは不埒千萬。御用もあらん早や奥へと。地いふ顔じつと打詠め。阿ほんにまあ女の心と男とは。それ程迄違ふものか。兄齋藤藏之助殿にお頼み申して。春長様の奥勤めも。あなたのお傍に居たいばかり。今更いふも。地恥かしながら。地去年の初春洛東の。地主の。お庭の花盛り。腰元どもに誇はれ。願ひかけまく初戀の。色も香もある殿御ぶり。観音様のお仲立ち。五ひの胸の下帯も。とけて嬉しい新枕。變るまい

ぞのお胸が直ぐに心の誓紙ぞと。片時忘れぬ女房が。お傍に居るがお厭ならいつそ手にかけて給はれと。びんと栂木の絲櫻。フシ花も亂るゝ風情なり。地さしにも猛き蘭丸も。心の外の曲者に。取控がれて背撫でさすり。阿イヤもう何事なう申せしがお氣に障らば眞平々々。百萬の強敵にもびくともせぬ某が。フシ斯くの通りと手をつけば。阿エ、又人を術ながらすのかいなア、春長様も大方に。班女が聞のお陸首。地お局様の取柄で出船の相伴。サアござんせと手を取れば。阿ハテサテたしなみや。人目を忍ぶ二人が中。殊に今宵は君の宿直。地又の首尾をと撰切るを無理に。引立て奥の間へ。入るやいるさの月影に。しのぶの亂れみだれあふ。わりなき夢や。フシ結ぶらん。地早や更け渡る。夏の夜の。そよ吹く風も物凄く。腰られぬ儘に御大将。手づから陣

子押開き。何心なく茂みの方。見やり給へばさわく〜と驚き騒ぐ時の鳥。阿ハテ訝かしや。まだ明けやらぬ夏の夜に。庭木を離れ騒ぐ群鳥。地合點行かじときつと目を付け。怪み給ふ時しもあれ。遠音に響く鐘太鼓、春長つゝ立ち耳そばだて。阿アレ〜次第に近付く人馬の物音。宿直の者はあらざるか。急ぎ物見を仕れと。地仰せの下より阿野の局。長刀掻い込み走り出で。阿君の大事に候ぞや。蘭丸殿は何所にあるか。早く物見を致されよ。地妾も俱にと表の方。フシ呼はり〜駈けり行く。地色聞くに蘭丸一間より。飛んで出づれば春長聲かけヤアヤア蘭丸。阿反逆ありと覺えたり。急ぎ物見を仕れと。地上意にはつと蘭丸は。オトリ振返り見る廊下の高欄。これ幸ひの物見ぞといふより早く駈上り。地四方をきつと打見やり。阿ノ。物の黑白はわからぬ

ど。この本能寺を志し押寄するは。察する所武智光秀。ナホスリヤ光秀が反逆とな。今こそ後悔汝が諫め。聞入れざるも傾く運命。只此上は防ぎの用意。ハア委細承知仕る。がたとへ。一致に防ぐとも院内僅か三百餘人。思へば〜主君と俱に。蘭丸我が君様。地チエ、口惜しやと主従が。怒りの齒がみ逆立つ姿。スエ無念涙の。フシ折からに。地色表の方より森の力丸。廣庭に大息つぎ。阿ノ御油斷あるな兄者人。武智光秀我が君に。多年の恨みを散せんと。地手勢選つて四千餘騎。左馬五郎を始めとし。或は齋藤藏之助築地間近く押寄せて候と。いふ間もあらず蘭丸は。其儘。フシひらりと。飛下りて。阿我が君には恐れながら防ぎ矢の御用意あつて然るべし。地イデ某が彼處に向ひ。一當あて、眠りを覺さん。力丸來れと兄弟は。フシ飛ぶが如くに駈り行

く。地色跡打見やり春長公。此上は防ぎの一矢。まづ差當つて一大事は三法師。阿ヤア〜宗祇。若を誘ひ早く〜。地御誼の。道具歸カ、下にかひなく〜。ナホス。しのお諸共茶道の宗祇。若君抱き参らせて。フシカ、リ足もわな〜阿震ひ。しのおも俱に。フシうろつく所へ。地多勢切抜け阿野の局。其身は數ヶ所の痛手ながら。血に染む長刀かい込んで心も強に立戻り。阿申し〜我が君様。最早敵は込入つて候へば。君に代つて一軍。御身を連れ下さるべしと。地口にはいへど御名残り。フシ涙彌増すばかりなり。阿ヤア愚か〜。なまなか身を連れんと却つて名もなき奴原に。首を渡さば死後の恥辱。汝は我に成りかはり宗祇引連れ三法師を。何とぞ守護し落ち延びて。此旗諸共久吉が手に渡し。我が存念を晴させよ。地猶豫は却つて不忠の至りと。仰せ

にわつと泣崩なみよをれ。たとへ不忠になるとも。君の御最期よそになし。何と此儘落ちられう。此儀はお赦し下さりませ。これを思へば自らが宵の酒宴の其時に現女まへにめが闇の託たくち言。其一さしの扇とは。別れを告げし知らせかと。思ひ廻せばいと猶悲しいわいのと。どうと伏し歎き沈めばお道理と。心を汲んで諸袖もろそでを。絞るしのぶが俱涙なみだ。フシ泣く音を添ゆるばかりなり。地色數多の斬首片手に提げ庭先へ。立歸つたる森の蘭丸。それと見るより春長公。同ホ、今に始めぬ汝が働き。シテシテ様子は如何に。されば候。二條の御所へは武智光安立向ひ。當手の寄せ手は左馬五郎光俊。采配取つて厳しき下知。なれども味方は必死勇者。御覽の如く首射取り。一泡吹かせ候へども。始終の勝利は。成程々々。只此上は潔よく。死出の三途さんずも主従俱に。サア今聞く通り

我が覺悟。早く此場を落延びぬか。但し三世の縁切らうや。サア其儀はなア。縁切るが悲しくば。一時も早く落延びよコレサお局。君の先途を見届くるは此蘭丸。片時急ぎ裏門より。宗祇坊は何をうつかり。ヲツト合點。イヤもう最前から落ちたうて。氣は上つり。コレ。しのぶ殿もお供の用意と。地いへどさすがに忍び夫。云ひたい事も面伏萎れ。泣く。フシ立上れば。地蘭丸聲かけ。しのぶは君の御供叶はぬと。地聞いて悔り驚くしのぶ。同エ、そりや何故。ホ、汝にお咎めなければども。そちが兄齋藤藏之助光秀に一味の反逆。敵の末は根を断つて葉を枯す。命を助け其儘歸すは是迄。サア是まで君への宮仕へと。地明けていはねど妹と春の。中を隔ての垣となる。しのぶが憂き身詮方も。涙ながらに用意の懐劍けん。咽にがばと突立つれば。コハ何故と

驚く人々。大将春長感じ給ひ。ホ、女ながらも通れの生害。兄と一つでない潔白。今日只今春長が仲人し蘭丸が宿の妻。心残さず成佛せよと。仰せに手負蘭丸も。はつとばかりに有難涙顔に紅葉のからくれなゐ血汐に染まる兩の手を。合すも二世の名残ぞと物いひたげに夫の方。御大将を伏拜み。笑顔を娑婆しやばの置土産。フシあへなく息は絶えにけり。地色歎きをよそに御大将。勇を付けんやアヤア蘭丸。同我はこれにて討手を引受け。此場を去らず討死せん。汝はこれより馳せ向ひ。敵の奴原一泡吹かせ。名を萬天に輝かせよと。フシ勇め給へば。同ハアハアハ、、、仰せにや及ぶべき。たとへ光秀。何萬騎にて寄するとも。片端撫で切り捲り立て。君の御供仕らん早やおさらばと。フシ立上れば。地色涙を拭ひ宗祇坊。局を。フシ諫め勸むれば。地是非も

涙に袖の浪。漂ひながら若君を。宗祇が背にしつかりと。これぞあふぎの憂き別れ見かへる。名残見送る名残、又立戻るを蘭丸が。中を隔つる鯨波。早や亂れ入る諸軍勢。切立て確立て女武者。其名も。高く假名書なづかの。筆にとよめて末の世の美談と。こそは 三重へなりにける。寺中は合戦眞最中。力丸蘭丸一同に一進一退離散して。或は討たれ或は討ち。續く新守あらばもあらばこそ。堅甲利兵けんぎょうりへいの大軍を防ぎ戦ひ。流る汗と湧出る血汐。唐紅からべにに水くぐる。龍田りゅうでんの川に楓葉もみぢの。落ちて流るゝ如くなり。寄手の從しやう將安田作兵衛。春長を討取らんと。舞際にさし寄れど。味方の勢に隔てられたやすく内へ寄付かれず。得たりと鎧を力杖。えいと一はね高舞たかまいに。飛上りたる早業はやわざそく目覺しかりけるへ次第なり。さしも名高き舞場も修羅しゆらの巷と鳴る鐘

の。天地にひびく陣太鼓。亂聲に打立て。地色先に進みし田島の頭。手勢引具し一同に喚き叫んで攻めかくれば。春長公一越調。阿反逆光秀は何所にあり。主に背く天筒思ひ知らせてくれんずと。地弓杖ゆづりついて罵る大音。さしも勇ある武智勢。恐れて思はず進みかねたじろく隨に差詰め引詰め。射給ふ矢先に先手の軍兵。はた〜と射斃され。仇矢は更になかりける。地色此虚に乗つて坊丸力丸。鎧を捨て八方へ突立て確立て阿修羅あしゆらの如く廣庭。さしてへ追うて行く。地客殿には春長主従。膝を並べてどつかと坐し。力丸無念の齒がみをなす。阿エ、口惜しや。往昔天文年中より。今天正十年迄。四海の内に横行して。武威を以て天下の兵亂を切りしづめ。民の塗炭の中に救ひ。四方の敵國君の英名を。鬼神の如く恐れふるひ。正二

位右大臣に昇進し。大業既に成就せしに。遊臣惟任が爲に空しくならせ給ふとは。地天魔の所爲か口惜しやと。血汐に注ぐ。血の涙。止めかねたるばかりなり。地春長一言の詞もなく。御佩刀を脇腹へ。がばと突立て引廻す。俱に冥途の御供と。力丸坊丸殉死の切腹無慙といふも餘りある御身の。果てぞ。三重へ哀れなり

同 三日の段

地葦草は漢室を焼捨て伯知は水を以て趙を浸す。例をこゝに眞柴が軍師名に高松の城廓も。水死の合戦強男も。手に汗。握るばかりなり。地色武家の家でも姦しき。腰元どもは寄擧り。何とあげは。毎日々々降る雨で水の増さるが瘡の種。是といふも尾田勢の皆仕業。中でも憎いは眞柴とやら松葉とやら。突きさが

してやりたいわいなう。ヲ、コレ／＼
その突き序にお痛はしいは。妹御の玉露
様。浦邊山三郎様にきつい惚れ様。大方
婿のあく時分になつて。山三郎様の爺御
本之進様。アノ林丈左衛門めにお討たれ
なされた故。此程はふら／＼と戀煩ひ。
ヲ、左様かいなう。此方も覺えのある事。
どうぞ首尾して上げましたいと。地さす
が優しき女の情。ヲ打連れ一間へ入り
にける。地色思ひ内にあれば。其色眼中
にすゝむとかや。父の最期に亂れ髪。無
念の仇を。角纏。浦邊山三郎利氏は。主
の。留守を親うて。林を一本刀恨みん
と。屋敷へ入込む。ヲ生生死の境。斯く
と白齒の。玉露が。出合ひ頭に見合す
顔。はつと驚き引返す。袂に縋りコレ待
つて給へ浦邊様。阿お前は深いお望み
が。あつてのお越しと。見たは遠はぬ姿
かたち。地其お姿に戀ひこがれ。送る千

束の返事さへ。ないは無情いお心ぞ。せ
めて一夜の添臥を。赦して給へと取付い
て。じつと。締めたる手の内に心。ヲ
餘つて見えにける。阿コレ／＼聲が高
い。推量の上は包むに及ばず。匿まひ置
かるゝ敵丈左衛門。何とぞ今日中に手引
きして。勝負を遂げさせ下さらば。こな
たの心も無足にせじ。サ、何とと。地
急いたる面色。玉露も胸を据ゑ。阿成程
成程。わたしが爲にも勇御の敵。折を見
合せアノ垣越しに。ナ御案内申しまし
よ。ホ、其詞に違ひなくば。まだ云ひ聞
かず仔細もあり。此方の部屋へ。地そん
ならかうと手を取つて。顔は上氣にちる
花の。玉露姫は情の露。濡れに。ヲ彼
所へ入りける。地折もこそあれ立歸
る。館の主清水長左衛門宗治。智勇を兼
ねしその骨柄。ヲ跡に。従ふ。女房はま
だ。十九二十二三つ。雪の白粉やり梅が

紅花色添ふ。嬰子を。抱きたたり立。ヲ
歸る。地宗治は眉をしわめ。阿ヤイやり
梅。晩春の末より三家へ人質。悴諸共遣
はせし處。いまだ合戦の勝利も決せず。
敵に圍まれたる此城中へ。歸されしは仔
細があらう。何と／＼。ヘア、尤ものお
尋ね。此度三家御加勢に向ひ給ふといへ
ども。手を空しくして日を送り。水の手
一つ切る事叶はず無念さはそれとても同
じ事。もし討死致されては大事となる。
手段を以て一時の合戦は遠からじ。それ
迄は英氣を養ひ置かるゝ様。要を晴すは
コレ此若。随分々々やり梅も。心を付け
よとはげしき御説。此子の顔も。見せた
さ。地見たさと醫に愛持つやり梅が。ヲ
シ色ぞ籠りて。見えにける。義に張詰め
し宗治は。指折りて日を算へ今日は早や
六月三日鼻月の末より敵方に大變ある凶
星を見極め置きつるに。土俵を突上げ優

長なる仕方。間者を以て敵方の様子。聞出さんと思へども。これぞといふ謀なく。空しく入水する時は後々諸人の物突ひ降参するは家名の恥辱はまで度々の合戦に不覺をとらぬ宗治が。猿冠者如きの計略。かく口惜しき籠城も天より我を責め給ふか。何とせんかとせんと。名に秀でたる武士も。傾く運と突く息も。スエテ天を睨んで。居たりける。地、慌しく庭先へ。士卒一人駆け來り。何か談する筋ありと郡家よりの使として。安德寺和尚只今本陣へ参著せり。殿にも早く御越しと。云捨て家來は引返す。汝が歸城の上安德寺の使の様子聞捨て難し。これより諸士に對面致し。事の仔細を申し聞かん。其方は郡より預りある丈左衛門。四人同然なれば。萬事心を付けよ。サ行け。地心得ましたと立上り奥と。表へ引別れ。二の丸さして出

でて行く。地雨吹拂ふ松風の。夏山こめし。蟲の音を。オウしるるべに。漂ふ浦傳ひ振も。小棲もかひなく。夫を導く健氣の玉露。花も木草も落花狼藉。互に切合ふ穂先と穂先。汗に浸するばかりなり。地いらつて切込む太刀先を。しかと受止め丈左衛門。小賢しい浦邊山三。おのれが親の空之進。評議の席にて某に悪口吐きし入耳蟲。討つて棄てたを恨みに思ひ。双向立は及ばぬ事。ヤアぬかしたり丈左衛門。さいふおのれは。冠山の落城をよそに見て。當城へ逃込みし人畜生。父の仇方々の恨み。思ひ知れよとはねかへす双尖き雙方が受けつ。流しつ烈しき争ひ。見る玉露は心も空。山三が念力通じけん林は刀打落され。逃げんとするを切伏せ。父の敵覚えよと。乗つ懸つてとどめの刀。

嬉しや。コレ玉露殿禮は未來でおさらばと。腹搔切らんとする所。戻りかゝりし長左衛門。ツヤリ梅諸共走り出で。ヤレ死ぬるとは狼狽者。赦しもなく敵を討ちし言譯の切腹ならば。某が計ひを用ひ。まさかの時の討死こそ武士の道。城外の水を濳り。久吉の陣所へ馳せ込み。偽りならざる次第を頼み。匿まひ黄ふが術の第一。敵の空虚變の次第。相圖を以て知らされよ。折もあらば眞柴を討取り。名を末代に残されよ。サ、一時も早くくと急ぎ立つ清水。ハア、コハ有難し。武士の數にも入るべき大功。命を的に仕果せて。立歸らんと驅出す。ヤレ山三様お待ちなされ玉露様とのわりなき中。最前ちらりと。アイヤ申し宗治様。お妹御と浦邊様との二世の御縁。ホ、好き合うた二人が中。門出を祝する。地扇も時の島臺土器。松は元來

常磐木の。繪にはあらざる松竹梅。オナリ末廣。びろと。フシ夫婦の固め。四ハア、重々の御恵み。玉露殿も随分無事で。お前もお怪のない様にと。地立派にいへどなまなかに。★、★馴れし枕のもつれ髪離れ。難なき兩人を。わざと制する宗治夫婦。扇屏風やあぶぎの別れ。心定めて城外へ飛ぶが如くに。三重へ駆けり行く。地裏沙背水の謀を廻らし。見ぬ唐土の元帥も。舌を巻くべき稀代の軍術。オナリ水嵩増さる大河の流れ。堰止めたる土俵岩石。大木。運ぶ地車の。木やり音頭も跛馬。揃はぬ肩も降参の。フシ空腹武士知られる。地加藤は土手の高みに上り。四ヤア者ども。汝等は悉く降参の者どもなるに。此度の勤王。大将始め某まで満足せり。此合戦終りなば。急度御扶持あるべきぞよ。ソレ兵糧を遣ひ終らば。暫時は休息致すべしと。地下知を傳ふる其

内に。向うに何か騒ぎし人聲。正清きつと打詠め。四ハ合點の行かぬ。高松の城外に怪しき取合ひ。何にもせよ心得ずと。地瞬もせず見渡す向うに。我組止めんと數多の軍兵。小船に打乗り。右往左往に。コハ、追廻せば。山三郎は水中を。潜つづけ抜けつ働けば。鶴よりも早きフシ水練水魚。地そこよこよと組子ども。フシうろつく中に。船先を持ち。えいやうんと打返せば。水は漫々小船の組子浪の藻屑となりける。此有様に残りの兵船。進みかねてぞ。三重へ見えにけり。地此方の岸には正清が。何者なるぞ心得ずと。手ぐすね引いて待つ所へ。血氣の浦邊は抜手を切り。忠孝二つを額に當て。飛鳥の如く遙かの堤。一聲諸共。フシ飛上れば。地何者なるぞと取巻く難兵目もかけず。加藤が前に兩手を突き。四某は那家の家臣浦邊山三郎利氏と

申す者。高松の城内に於て。親の敵を討取り。立退かんとせし所。城中より討手かゝり手詰めの難儀何卒武士のお情に。御匿まひ下さらば生々世々の御厚恩と。スエ敬ひ入つてぞ願ひける。地加藤正清聲を荒らげヤア紛はしき願ひの筋まこと親の敵を討つは武門の譽れと。郡家より恩賞もあるべき管却つて搦め捕らんとする高松勢。紛はしき御邊の偽り。眞直ぐに申されよと。疑ふ詞に。四ハ、ア御尤もなる御仰せ。某が討取りし親の敵と申すは。冠の城を拔出でし。林丈左衛門と申す者。我が父奎之進と聊かの論により。父を欺し討ちに討つたる事。其無念止む事を得ず。何とぞ仇を報ぜんと主人へ敵討を願へども。軍中とて取あへなく。剩へ敵丈左衛門は清水宗治殿に預けとなれば心に任せず。空しく月日を送る内。此度の合戦に付き。久吉公の計略にて。一

城諸共龜の如く。水底の藻府（もろ）とならんは
治定（ちやうてい）。然れば父の鬱憤（うきん）を散ぜん時節（ときせふ）なし
と。隙（ひま）を窺（うかが）ひ本望（ほんぼう）は達（たつ）したれども。御赦
しなき敵討（てきうち）。いかなる咎（とが）めあらんも知れ
ず。惜（あは）しむべき命にはあらねども。亡（な）き
両親の跡（あと）をも營（い）み。其上（そのかみ）にて切腹致（きりばし）す我
が存念（ぞんねん）。地暫（ち）しが程の御恵（ごゑ）み。御聞き届
け下さらば。忘れ置かじと手を搦（にぎ）つて。

頼めば正清につこと笑ひ。四ホ、事明白
なる汝が願ひ。尤も其理なきにはあらね
ども。敵々たる此時節。諸卒の疑念（ぎねん）も如
何（いか）なり。萬事は主人の賢慮（けんりょ）にあらん。日
も早や西に傾けは。イザ同道と。地正清
が深き心の計ひや。士卒來れと夕眺（ゆふなが）の。
下知の詞に。ハ、はつと。立上れども内
心は。久吉討たん血氣の若者毒蛇の口
の。水筋を。ハズミツン伴ひてこそ行過ぐる。
フシ向う遙かに。漕ぎ渡る主は誰とも白浪
を。振（ふ）と衣の戀無常。急ぐ船路や行く空も

浮世。なりける 三承へ次第なり

同 四日の段

地東魚來つて四海を呑む。西鳥來つて東
魚をくらひ。四海既に穩かならざる。戦
場の地の利を窺ふ山傳ひ。近習召連れ陸
景は。フシしづく谷間に立休らひ。四
ヤアく方々。此度の合戦誠に武門の晴
れ軍。郡の枝城尾田がために悉く落城に
及びし上。軍慮に賣（う）しき清水が城廓。久
吉が謀に乗ぜられ。入水（いりづみ）となりたる高松
の味方を助けん其爲に。地遙々此土に陣
を取れども。敵の要害強くして。味方を
救は術なく。三家の心もまちくたる
に。三澤久代が非道の企て。隆景が見察
遠はず白狀の上。國元へばつ返し禁籠申
付けし上は。敵方へ裏切りなさん妨げな
ければ。先づ此山の頂に塞を結び敵陣
を見づもり。明日中には攻めかゝり。敵

の勇氣を試みんはサアくいかにく。
ハ、ハ、仰せ迄も候はず。我々どもは先
手を乞ひ請（こ）け雄の合戦。一命は風前の
塵（ちり）は金鐵。千變萬化とかけ破り。さし
も名を得し久吉が。頭を取らんを瞬（ま）く
内。御心安く思召せと。フシ實に勇しく
見えにける。地遙か向うに人音は何者
なるかと見やる内。現世未來を一寺に納
め。大地の僧都安德寺。清水が妹玉露
姫。く伴ひ歩む一木の影。地それと見
るより手をつかへ。四ハア隆景公には御
健勝の體、恐悅至極。拙僧今日清水長左衛
門祿へ御陣見舞に参りし處。妹御玉露様
を以て何か密談の御使。味方の諸士にも
心置く籠城。幸ひなる安德寺誘ひくれよ
との御頼み。委しき仔細は存せねども。
これまで同道仕ると。地申上ぐれば玉露
も。面はゆげなる顔を上げ。四女のあら
れぬ事ながら。敵の陣所へ使の役。隆

景様の御賢慮を。伺ひました其上と。兄上の指圖ゆゑ。安徳寺様諸共にお見舞かたぐ参りしと。地差出す文箱小梅川。

手に取上げて讀み下し。四ム、一旦和議を相調ひ。事を計らん計略あれと。先達て申遣はせし所。此使に惠瓊老。清水が妹玉露を差越さんとは面白し。さりながら大地の住職。敵陣への使者とは憚りあれど。他聞を恐れる密事の大役。足下ならでは叶ひ難し。地先づ一陣屋へ入らせられ。暫時の休息あるべしと。地詞の折もこなたなる。茂みの枝に飛逐ふ數多の鳩が。争ふ餌ばみ。隆景きつと打詠め。四ハア、あれ見よ。只今鳥類の餌ばみの争ひ。思ひ合はずは昨夜の夢。我が陣中へ飛來る村鳥。色めきたる草葉を啣へ。鷹塚山をなしたると見えて夢散ぜしに。目前人を恐れず餌による鳩の嘴先に。實めつゝきたるアレあの蔓物。瓜は春長

の紋所。三つ五つは五體を表し。其身を包む衣服こそ敵の城廓。鳩は源家の臣鳥。我は清和の末孫たり。此蔓物の瓜によりし。尾田春長を一戦に討取るべき神の告げか。但しは敵に變ある告げか。地ハテ怪しやと明慮の大將。尾田を討つたる光秀が。京都の大變神鳩の不思議は。フシ後にぞ知られたり。地安徳寺進み出で。四ハア、智人の仰せ至極せり。唐土周の世に當つて。赤色の烏武王の陣に泊る。人々怪しみ迷ふと雖も。大公望これを吉なりと悦す。果してその詞に違はず。周武の正に天下となる。君にまつ其如く。今陣前に鳩の集りきたるといふは當家の吉瑞。愚僧もそぐはぬ勳場の。役目もやはり此姿。赤色ならざる此衣の頭ごかしに取入つて。強氣の尾田方取控ぐも。國家の御爲天下の爲。玉露様にも御油斷あるな。ホ、御念に及ばぬお僧

様。わたしも名に負ふ清水が妹。見馴れ聞きなれ軍學軍術。夫に迫り力を合せ。味方の怒り兄様の。無念を晴らすは敵の大將久吉が。首討取つて立歸らん。地やはか仕損じ申すべきと。詞涼しき玉露が怯める色なき武家育ち。フシさも勇しく見えにける。地色かゝる所へ味方の郎等片山藤太。水に浸せる惣身の。汗諸共に押拭ひ。四仰せの如く水中を潜つて敵の陣所に近付き。事の様子を窺ふ處。地猶も流るゝ水筋を。堰き切る手當の石槽。四或は土俵蛇籠の用意。これを支ゆる清水が郎等。四忍び入つて水筋を。切らん正清近寄る軍兵事ともせず。四右と左に確立て迫立て切伏せられ。地水の哀れと流れ行く清水が勢の敗軍は。目も當てられぬ無慚の有様。斯くて空しく時日と送らば底の水屑となり行く城兵。御賢慮あ

つて然るべしと。フシ息繼ぎあへず訴ふれば。地隆景は打點頭き。詞かく迄敵に取切られ。拔駈けて高名せんとは。自殺を招く清水が城兵。只此上は惠瓊老宗治と申し談ぜし如く。玉露諸共久吉が陣所へ立越え。兩家和睦の計略こそ肝要ならんと。地隆景が。詞にはつと頭を下げ。詞修羅の巷へ出家の身の。入るべき筈はなけれども。地危急を救ふも教への道。玉露様には御用意あれと。勇み進めば神妙々々。兩將へも此趣具に某首上せん。地イザ兩人も本陣へ同道申さん來られよと。物に馴れたる小梅川。その名芳し武士の。刃切れ突き直焼刃。鍛ひに鍛ふ隆景が譽れは。世々に。三重へ顯はせり

同 五日の段

地聞隣山押一同して風雨烈しき中國の。

物騒がしき蛙が鼻。久吉公の陣館。亂杭高垣幕結ひ廻し。兵具奔しと竝べしは。フシ事嚴重に見えにける。地太郎兵衛治郎兵衛と呼び集め。落葉枯枝をかき寄せて。フシ湯氣を拂ふ雜兵ども。一つ所に寄り集り。詞何とかうした所は。かんしやうゆうの煙と出かけた。ヲ、サク、今にも合戦というたら戦場の切合ひ。集錢出しの飲み喰ひ。軍場の小商人の手目上げさせてやらうもの。何をいうても長の籠城。我が身で我が身の儘ならぬと。地重き口から。空ぞめき。ちんぶん勘六智慧あり顔。へ、へ、尤もなり。フシ勇しし。地某とても戦場に出で立ちなば。かの唐土のあぼす東六が奇計を以て。鎗先突き餅田樂。串さしながら掴み喰ひ。鬼殺しと見るならば。あたり次第に飲乾して。代物といふ大敵には。喰逃げ。飲逃げ。早い勝ちと纏々が。咄しの耳を。フシ

突抜く鐘。詞スリヤこそ軍が始まると。地達者なものは口ばかり。足も。フシしどろに立つて行く。地スハ事こそと加藤正清。一間を出づる庭先へ雜兵一人駈來り。詞只今遠見いたせし處。怪しの兩人陣中さして參るよし。引提へ詮議に及び候處。郡高松兩城より使者として。女人僧一人。通しませうやと伺へば。ホ、使者とあれば捨てても置かれず。案内致せと追立てやり。地待つ間程なく取次に。フシ従ひ來る葉月の。無地使者は二八の品形。振の袂に名香の。尊き寺僧諸共に。フシ使者の座にこそ。著きにける。地正清威儀を繕ひて。詞これは、郡高松兩城よりの使とあつて珍事の御兩人。お使者の趣承はり。加藤取次仕らん。地様子いかゞと正清が。尋ねに愛持つ玉露が。詞ハア、正清様とやらお取次の段御苦勞に存じます。自らは高松の城將清水宗治

が使玉露と申す者。清水申越さるゝ趣は。此方の家中浦邊山三郎と申すお若衆様サア其山三郎不慮に城内を抜出でたる不忠者。御匿まひの由承はり。早々使者を以て所望に及ぶと雖も。御歸し下されざる段我なども不審晴れず。もしや使の不念無骨なる事ばしあつて。武士の意地を立てぬき御歸し下されんも計り難し。

此度は汝參つて御機嫌の伺ひ。同道して立歸れとある使の口上。御前宜しく御披露と。地詞のあやも玉露が。フシ詳か

に相述ぶる。地安徳寺詞を正し。同玉露の申さるゝ通り。浦邊山三郎は郡の家人同然故。此方よりも使を立つると雖も御承引なきによつて。頭役に愚僧が使。地兎にも角にも貴所の御執成偏へに頼み存すると。頭を下ぐれば加藤正清。同何事かと存ぜしに。浦邊について昨日といひ今日といひ。何か事もありさうなる三家

の胸中。軍は脇へ取置いて。福原梶田の勇將等馬を出さるゝは。この虎之助一切合點參らねども。女儀の使出家たる御方を追返すも大人げなし。取次は致し申さんが暫時隙いる事もあらん。あれなる一間に相待たれよ。地然らば後刻と式禮目禮。玉露引連れ安徳寺。オクリ左右へへこそは別れ行く。地朱明の空も一面の雲かけ隔つ浮草の。浪に。漂ふ山三郎。又降る雨に足音の紛れ出づるもしめくんと。フシいと愛さをや重ぬらん。

地色後の此方に玉露が。物音窺ひ立出づる襖もそつと人目の關。盡きぬ縁の顔と顔。なうなつかしの山三様御身にお怪我はなかりしかと。縫り付いたる振袖の竝ぶ翼や連理の縁。妹脊。フシわりなく見えにける。同これは思ひがけもなき玉露殿。何故爰へは來られしな。サイナ此城中へ入込みしも兄様の深き御思案。お前

に逢うて力を合せ。眞柴を討てとくれぐれの仰せ。首尾よく仕果せ立歸らば。誰憚らぬ夫婦中。地手柄を見せて下さんと。夫頼みの女氣は。フシ胸に潰潮ぞなかりける。同ホ、我もやたけとはやれども。一かたならぬ名大將。猿冠者の猿智慧と聞きしに違ふ眞柴久吉。此軍配に我我しきが及ばんや。所詮すごゝ高松へは歸られず。清水殿への申譯。只今腹切り相果つる。其方は立歸り此通り傳へて給へ。地さらばとばかりに柄に手を。かくる夫に縫り付き。同マア待つて下さんせ。姫御前の身で敵城へ。お使者に來るも何故ぞ。お前に逢ひたさ顔見たさ。地死なば一所と語らひしわたしを振捨て死なうとは。聞えぬわいな嗣欲な。わたしを先へ手にかけて殺してやいの我が夫と。命惜まぬ武家育ち。涙色めく婉戀の袂は。フシ戀の淵ならん。地色涙隠して

山三郎。則ヤアいらざる練言嗜まれよ。

敵へ漏れては五の恥辱。地そこ放されよと突き退くる。イヤ〜。わたしも

俱にと争ふ後。ヤレ早まるなと聲をかけ。立出づる眞築筑前守久吉。則高松

より使者に來りし玉露へ。山三郎を返し與ふる。又浦邊へは此書面。久吉が心を

こめし清水殿への贈り物。この役目仕果せなば抜群の高名手柄。はや〜小船にて歸城せよと。地差出し給ふ情の賜物。

其文章は知らねども。一先づ城へ立歸り其上生死を決せんと。心定めておし戴き

足早にこそ駈出づれば。夫の跡に引添うて命の親の久吉様と。悦び足も地に付かず。フシ飛ぶが如くに立歸る。地色又も

聞ゆる陣鐘につれて駈來る女武者。金石ならねど湯王鯨萬葉を亂し都より。夜を

日に繼いだる阿野の局。則久吉公に御見參と。地支ゆる組子事ともせず。フシ廣

庭傳ひ歩みくる。ヤア者ども某に逢はん

とある女武者。曲者なりとも何程の事やあらん。對面して取らせんず。者ども引

けと。地御下知の。聲聞取つて阿野の局。ヤア久吉殿かといふを押へて傍を見

廻し。則音高し。御自分の形相一方ならず。一大事の注進ならば。敵へ漏れ

ては味方の非運。心を付けて物語られよ。地腹帯しつかと。フシ即座の氣付

け。則サ、様子は如何。何と〜。ハア、されば候春長公には安土を立立ま

し〜て。都本能寺に入らせ給ひ。中國加勢の御手配り諸軍を催す時こそあれ。

地逆臣武智が夜討の企て。則フウ何光秀が謀叛とや。シテ〜勝利は如何に如何

に。ハア、明くれば二日子の下一刻。地水さへ音なき眞の闇。早や洛陽に亂れ入

り夢驚かず俄かの戰場。則太刀よ具足も乏しき寺内。數萬の敵は甲冑に身を固め

たる小手鷹當。地味方は薄衣練錦。濃紅の玉襷。則自ら始め蘭丸兄弟。死地に入

つたる働きに庫裏方丈も忽ちに。血汐隈どる修羅道の。巷に迷ふ築山かけ。射つ

つ射られつ切つ切られつ劍の山。八塞地獄となる鐘は五臓を射抜く君の弓勢。

先手の軍兵一筋の。體につらなる三人五人恐れをなして引退く。則シテ〜君に

は御安泰にてましますか。氣を付けられよ阿野の局。ハツア。君には御安泰に

ましますか。心許なしいかに〜。ハツア。申すも便なき事ながら。運の盡きと

て蘭丸殿。田島が手鎧に無念の最期。地勝に乗つたる光秀方。味方は残りず討死

し。則春長公にて御腹召され。シテ三法師君は。若君様は細川殿へ落し參らせ。

二條の御所も一時に亡び火中の煙と失せ給ふ。地是ぞ籠のお家の御旗。此上は久吉殿の智略にて。武智を討取り亡き我が

君の亡魂に。手向けて給へや真柴殿と。

死ぬる今端の際迄も。君を大事と張詰め

し心の花もがつくりと折れて散り行く真心

心真死。フシ義女の鑑を殘しける。地色始

終の大變聞く久吉。身體忽ち壞敗に苦し

め。スエテ途方に暮れて居たりしが。つゝ

立ち上り大音聲。阿ヤア／＼方々。我を

謀る女が不敵。只今某切捨てたりと。

諸軍の心まよはさぬさすが智人の名大

將。先立つ主君亡き人の生死はおなじ粹

弓。オチ吊ひに。フシこそ入りける。

地フシ無常に傾く。夕陽は。坊主頭も伸び

欠び。時刻移ると安德寺。エヘン。惠瓊

は咳拂ひしづく歩み獨言。阿ハレヤレ

この木の月中待せて置き。返答もせぬ上

に。鷹爪はまだな事。箆屑一服志さへな

き大將。主腹ばかり肥やすと見ゆる。餘

りな釣付け様佛の顔も三家の使。歸つて

此由。地申上げんと行かんとす。阿ヤア

ヤア安德寺惠瓊和尚。何所へござる久吉

對面仕らんと聲かけられ。ハ、ハ、ハ、いや

はや愚僧は生れ付いたる近飯。餘りの隙

いりに甚だ腹中窶因にせまり。一鉢の御

芳志に預り度く。勝手へ參るといふを打

消し。ハテさて久吉が志の供養ある事

を。眼前見捨てて歸られるお僧の心底訝

かし。そこ動くなと。真柴久吉。障子

をさつと押開き。上段に飾り置いたる金

鴨の。煙も薫する。フシ手向草。地色心

憎しと尻目に向け。阿ヤア大將の詞とも

覺えず。出家たる我を訝り動くなとは。

物を知らざる今の一言。ヤアいふな惠

瓊。都の大變立聞きして。郡へ注進せん

す心底隠しても隠されまじ。軍勢を引入

れ。修羅を導く悪僧。寺領が望みか知行

が望みか。返答聞かんと。地未前の眞柴

屈せぬ惠瓊。大口開いて高笑ひ。阿ハ、

ハ、ヤアぬかしたり猿冠者。愚僧を捉へ

悪僧とは何の癡言。おのれが主たる春長

は。伊吹山の鬼の再來。諸寺諸山まで賣

め苦しめ。佛敵遁れず本能寺の庭に於て

野仆れ死したる尾田の幕下。主に劣らぬ

暴れ者。五畿七道で喰ひ足らず。この中

國まで攻下り民家を苦しめ人種を絶やさ

んとする魔王の根元。亡ぼし絶やすが佛

の役番代の名劍請取れと。地はつしと打

てば確乎と止め。阿ハ、ハ、ハ、出家に似合

はぬよき嗜み。童劣りの坊主が悪口。久

吉が耳には入らぬ。まゝと相手になりたく

ば。天地の道理成佛の明らかなる事を悟

りし上。相手になつて取らせんと。地飽

く迄厭しき嘲弄に。奥齒碎くる無念の眼

中。つか／＼と立寄り。眼尻逆立て息を

つぎ。阿ヤア威勢に暮り人もなげなる今

の悪言。當時安德寺の大寺を踏へる此

惠瓊。童劣りとは何をいふや久吉。ホ、

たとへ大寺の名僧たりとも。心中に六道

の迷ひあつては。成佛の道思ひも寄り
ず。汝が目より魔王と見抜きし某が。天
地の道理を知らせんすと。地惠瓊を目が
け打掛け給ふ以前の蓮花衣。これは如何
にとためつすがめつ見て悔り。覺えの袈
裟は矢作の橋にて。天下を得ると見付け
置いたる奴殿かと。ッ呆れ果てたるば

かりなり。地久吉につこと笑はせ給ひ。
奴いかに惠瓊老。其時は臺無しの一丈
奴。算木書物も當てにはならぬと貴僧の
詞。後の諱と其時に申請けたるツレ其袈
裟。矢作の橋にて我が相面見付けし貴僧
の天眼通。此久吉が望む出世にあらねど

も。天より生ずる恵みなれば。悪しくな
思ひそ惠瓊殿。此上は尾田と郡の和を
結ばるゝが出家の役。よもや遠變はある
まじと。地明智の詞に安德寺。頭を摺付
け摺付けて。詞ハア、理非明白たる御仰
せ。訓狐といへる物は。夜は微塵の虫を

も見れども。晝は大山さへ見る事能は
ず。此坊主もまづ其如く。御身黒どんた
る日陰の其時はよく奇相を見分くれど今
天下に名を得。武威白晝に輝く時は相見
あはれず見損ぜし訓狐に等しき此坊主に
和議の御諱は冥加至極仰せに從ひ和談整
へ奉らんホ、早速の命得はさすがの名
僧。一刻も早く急がれよと。地仁者の詞

にハ、はつと。天より照らす久吉の威勢
に恐れ引きかへす。道は道なり明らか
な。ッ心照らして立歸る。地色跡見送つ
て久吉公。心を凝す軍慮の庭先。見越の
松が枝はつしと射たる。矢文はいかにと
立寄つてかなぐり開けば返書の實名。清
水が自筆一紙の血判つらつと讀み終つ
て表に向ひ。詞ホ、高松の城主清水氏。

眞柴久吉が一書の胸中。射抜きしは連れ
連れ。此上は三流を切落し諸人を助け與
ふべし。いざは是へに地清水長左衛門

宗治。豫て期したる討死の。弓矢打捨て
庭上にどつかと坐し。詞エ、天運強き久
吉殿。只今射込みし矢文の返書。いよいよ
御承知下さる上は。味方の助命頼み入
ると。地鎧脱ぎ捨て腹一文字にッ引切
る苦痛。地色夫の跡を慕ひ來る。妻は手

負ひと見るよりも。なう痛はしや悲しや
な。斯うした御最期させまいため郡一家
の人々より。わたしを以ての御教訓無に
なすのみかいたいけな。此子は可愛うな
いかいなと夫に縋り伏轉び。ッ前後もわ

かす泣き居たる宗治苦しき目を見開き。
詞ヤア愚や女房何縁言。那三家の人々は
某が胸中をよく御存知そ達親子に今生
の。暇乞ひをさせんす爲の御情。ハア、
冥加なや。ッ有難や。地色一歳の時よ
りも喰ひ込んだる大祿の。恩義はいつか
謝すべきぞ。詞それに引きかへ小知の
銘々主恩に命を捨つる。數萬人の最期を

は助けん爲の此切腹。玉露山三が密書の使心をこめし久吉の書中。味方に取つては百龜の浮木悦ぶ女房何吠える。氣を張詰めて悴をばよき武士に仕立て上げ。主君に忠義を怠るなど。地高松一の良將も。子故にくらひ深手の苦痛。見るに付けてもいや増る夫の最期稚兒の行末思ひやり梅は女の浅い心から。太守の仰せ誠ぞと斯うした別れ知らずしてお跡を慕ひ來たものを暇乞ひさへろくくにいひたい事の數々を。いつの世いつの添ひぶしに語らうものぞ情なや。アレくく何にも知らぬ稚兒さへ。虫が教へる寢覺めの愛てうちくは父上の。今はを拜む合掌ぞやと抱きしめく伏轉びたる女氣を。不便と察する久吉公堪へこたゆる宗治が恩愛一度に保ちかね清水。涌き來るはらく涙血水川邊に浪越えて土砂吹飛ばす如くなり哀れを見捨て、眞柴久吉彼所を

屹度打見やり。詞アレくく見られよ兩人相圖を以て川筋の土俵岩石嫌ひなく。切つて落せばありく平地とをさまり城外へ。地遁れ出でたる老若の悦びの聲鯨波。コレ見物あれと大將の。教にはつと心付き。詞エ、幸ひなるかなこれに物見と。地オケリ跪ほひく腹帯しつかと白布の。高見を傳ひコハリ攀登り。見聞く暇に高笑ひ。ハ、ハ、女房悦べ。死後の思ひ出此上なし。浮世の夢も今日限り。地昨日の敵は群れゐる白鷗。鯨波と覺えしは。地油風とこそ。フシ聞えけり。地色我は朝の露と消え清水流るゝ柳かげ。しばしが程の世の中に心残さぬおさらばと。白布解かんと。フシする所へ。詞ヤアく宗治暫しく。小梅川隆景。安德寺が理解によつて。尾田家一體水魚の囚。見届けて成佛あれと。地聲諸共大將隆景。衣紋改めしづくと入來る跡

に安德寺。手に捧げたる白晝は。神文とこそ見えにけり。互に和議を取納め。惠瓊は神文押載き。詞ハア、目出度く和談整ふ上は拙僧はお先へ歸り。久吉公の御神文兩家へさし上げ奉らんと。地禮儀も足も勇み立ち。フシ衣しほつて歸らる。地久吉は詞を改め。地兩家和順に及ぶ上は何をか包まん。主君尾田殿都本能寺に於て。武智が爲に御落命と。地聲擡疊る一雫。萬里にみちて。袖しぼる。地色驚く人々制する眞柴。弛みを見せじとつ立ち上り。詞主人の敵武智光秀。都に上り弔ひ軍三家の助力あるや如何にと。地聞くより隆景につこと笑ひ。詞ホ、軍の備へありながら手を空しくせし味方の若者。地研ぎたて置いたる弓矢の手前。願うてもなき後詰めの加勢。詞隆景宋をなし申さん。ホ、ハ、頼もししく。早や上京の用意をなさん。者ども早くと御

下知に。地加藤正清始めとし人馬狭し
と、ッ居ならんたり。地愛ひに沈むやり
梅を諷め宥めて隆景公。同父に劣らぬ武
士と小梅川が成人せん。同心残さず旅
立ちと。籠る情ににつこと笑ふが暇乞
ひ。此世の念も宗治が。忠義の家名稚兒
をもうり育つる仁者の道。雲きれ空も青
青と。天王山の晴れいくさ。名をとる射
とる弓矢とる。天下を鳥の聲につれ。い
ざや武智を討たんずと勇む正清兩將も。
都をさして ユリ三鷹へ出でてゆく

同 六日の段

地叔も逆賊武智光秀。多年の恨み一戦に
春長父子を討ち牽り。妙心寺に勢を構へ
勝ち誇つたる諸軍の勢ひ。俱に威風を顯
はして。オホシ備へ。ッ厳しく守りゐ
る。地中央には光秀の母皁月。褥の上に
座をしまして。イヤナウ四王天。同何事も

見ざる聞かざる云はざるに。咄があらば
嫁女庚申侍。ゆるりと聞かうドリヤ。地
奥へ行つて夢でも見まじよと。立つを引
止め田島頭。同後室様の御立腹。其理な
きにはあらねどもそれは一途の思召し。
幕下となつて春長へ。身を寄せ給ひし御
大將。地時を得て其機に臨むは。天の時
を知るといふ。何とぞ御機嫌直されて光
秀公に御對顔。偏に頼み奉ると。願へば
俱に嫁操。只幾重にもと手をついて。願
ふ心の夫思ひ。スエテ道理にも亦殊勝な
り。地皁月は少し面を和らげ。同それ程
に迄皆の衆が。頼みを聞かぬも年寄の片
意地。そんな息子殿の歸り次第奥へ知
らしや。コリヤ女子どもは来て腰を打
て。ヤアエイと。地老の立居も重々と。
嫁が介抱四王天。ッ引添うてこそ入り
にける。地斯くたる世にも花開く。色香
もしるき初菊が。奥の透間を立ち出で

て。同ほんにマア此十次郎様は。辛氣な
お方ではあるわいなア。こちの思ふ様に
もない。間がな透がな軍學とやら。色の
道には疎いので。一倍心を痛めると。地
女心の物思ひ後に立聞く十次郎。初菊殿
これにかと。いふ聲聞いて。同ヤア十次
郎様か。エ、聞えぬわいなと地ばかりに
て跡はえいはぬ。おぼこさは。赤らむ顔
に顯はせり。同これは又嗜みやいのう。
又しても。顔さへ見れば恨みのたら
たら。親々の許しを受け。コレ未來永々
變らぬ女夫。少しも隔てはないわいの。
ア、イエ、づんともうアタ辛氣な。永
永とやら未來とやら。地其先の世は。知
らねども。縁を。結ぶの神様が。御苦勞
なされ髪髪子の。振分け髪の其中から。
あれと是との結び合ひ。親の赦しもある
のを。つひに一度の逢ふ瀬さへ無いは。
餘り胸欲な。お情ないと娘氣の。胸のあ

りたけかき口説き恨み。フシ柳つぞ道理なり。地思ひは同じ十次郎。阿ハテもう今迄は不調法。以後は急度嗜む程に。コレ赦してたも。そんなら願ひを。ハテ誰憚らぬ許嫁。世間廣う遠慮はいらぬ。エ、忝なや婿しやと。地ひつたり抱付く妹と脊に。わりなく見えし。フシ縁なり。地折から轟く響の音。光秀公のお歸りと。知らせに悔り飛退く二人。所體繕ふこなたより。妻の操も出で迎へ。フシ待つ間程なく立歸る。武智十兵衛光秀。武威蕨かす強將の常に變りし。フシ屈託顔。地席を改め詞を正し。阿ホ、三人とも出迎ひ大儀。シテ母人には御機嫌よくお渡りなさるか。サアイナア先程も田島頭と自らがわつつ口説いつ。どうやら斯うやらお口が和らぎ。母公様とも睦じう。ム、ホそれは重疊出かいた。さあらば直ぐ様御對面。イ、ヤそれには

及ばぬ。母が直々參らんと地聲うちかけを引きかへて。木綿布子に風呂敷包み。背にちよつこり賤の女の。姿見るよみ。驚く人々。操は傍に摺寄つて。阿系圖正し武智の御家。殊更四海の武將とも仰がれ給ふ夫光秀。天下の御母公様ともいはる。御身が淺ましきお姿は。もしやお心遠ひしかと。地尋ねににつこと打笑ひ。阿ホ、忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系圖。元より武勇の家柄なれば。誰に恥づべき訓れなし。老いは寄れども心は鑽石。濁しても盜泉の水を飲まずとは。お身運もよう知つてゐやる筈。地心穢れた我が子の傍。片時も座を同じうせんは我が。日本の神明へ。恐れあり。伯夷叔齊を習ひ只。雲水に従うて出で行く母。これが此世の別れぞと。義強き母も恩愛の涙粉らす有様は。フシいと。哀れぞ増りける。地光秀は默然とさし俯い

てゐたりしが。阿操の方は涙ながら。阿コレ申し我が夫。母様の只お一人。いづくを當てと長の旅。なぜお止めなされませぬぞ。ホ、不忠不孝との御輕蔑み。今更申す詫もなく。せめては母のお心に遊はぬが寸志の孝。四海の内は此光秀が掌にある。お止め申すな其儘々々。ヲ、さすは悪人程あつて根強い魂。地チエ、いはん方なき人外めと。睨む目元にはらはらと涙かくして立出づる。心の張弓強弓の引きぞ。煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が。これなう申し祖母様と控へる手先。振拂ひ。フシ見返りもせず出でて行く。地わつと泣出す人々を。制し止めて。阿ヤア。者ども。母人の御行方いづく迄も見届けよ。御手道具の用意々々と光秀が。地鶴の一聲許多の軍卒。軍筒長持扱箱。其外雜具銀乗物。御母公様のお姿を見失ふなと足早に跡を。フシ慕うて

急ぎ行く。地影見送りに光秀は。何か心に打ちうなづき。詞奥操倅十次郎。嫁初菊もろとも次へ立ちやれ。用事あらば手を鳴すと。地心ありげな詞の端。アイとはいへど立ち兼ねる。ヤアぐづくと何を猶豫。早く立てよときめ付けられ。心は跡に残れども親子三人打連れて。相の山カ。是非なく。次へ入相の。フシ鐘が無常を。告げ渡る。ホシ實に物凄き庭の面。地忍び出でたる四王天。主君の様子如何ぞと。身を潜めてぞ窺ひゐる。それとは知らぬ光秀が、有合ふ視引寄せて。フシ筆喰ひしめし。唐紙の。表に何やらさら／＼。小オタリかくと。見るより十次郎瞬きもせず物陰に。守りゐるのも。白書院。只一心に。フシ書き認め。地筆投捨て、ひんずと坐し。諸肌くつろげ差添を。抜くや玉散る氷の双。や、打詠め兩眼に。はら／＼涙くひしばり。既に

斯うよと見えければ。主従小陰を走り出で。ヤレ早まり給ふな父上と。取付く十次郎四王天。鏡の如き兩眼を。くわつと見開き聲震はし。詞コレ我が君。コリヤこなた狂氣召されたの。今朝より始終の様子。心得がたく思ふ故。萬事心を付くる某。物陰より窺へば。出かし顔に辭世の一句。順逆二門なし。大道心源に徹す。五十五年の夢覺め來つて。一元に歸すとは何の癡言。君君見る事塵芥の如くせば。臣君を見る事怨敵の如しと。春長猛威に増長して。神社佛閣を燒失し萬民の苦しむる暴惡。神明これを誅するに。光秀の御手を以て討たし給ふ。天の與ふるを取らざれば。災ひ其身に歸す。左程の事を申さずとも。よく御合點のこなた様。切腹とは馬鹿々々しい。人は知らずこの四王天田島頭。殺す事罷りならぬと、フシ居丈高。詞フ、さうぢや／＼父の命は我

我始め萬卒に至る迄。御一身に及ぶ御命。臣義を守るとも。君これを補助せざるは。それ將とは申されず。地只生害は止まり給ひ。下萬民の苦しみを救ひ給へと右左。フシ涙と共に諫めの詞。地光秀はたと横手を打ちハ、誤つたり／＼。詞一天の君の御爲には。惜しからざりし此命。暫しは承らへ事を計らん。地先づは繪旨を乞ひ請けて。猶も昔かん者どもを悉く誅戮せん。詞急ぎこれより我は參内。汝等二人は久吉が。都へ上るを半途に待受け。一戦にぼつ返せよ。イデ裝束をと立上れば。地近習小姓が心得得。オクリ運ぶ。大紋立烏帽子。立派に著なす骨柄はあたり輝く其粧ひ。早や引出す栗毛の駒。フシ光秀ゆらりと打乗つて。地ヤア／＼十次郎。詞田島頭諸共西國へ馳せ向ひ。必ずともに油斷なく軍功を顯はせよと。地詞にはつと四王天ハ、ハ、ハ、ハ

君。御出陣には及ばずとも。爾某かの地
に向ひなば。猿冠者めが素頭を討取るは
手裏にあり。アイヤ〜彼もしれ者。定
めて遠き計略あらん。コハ親人の詞とも
覺えず。父に代つて某が。地軍配取つて
一戦に。敵の首を實檢に備へんコソ。氣
遣ひあるなど。勇み進みし。フシ我が子
の骨柄。ホ、地天晴れ〜潔よし。我も
跡より出陣と。手綱かいくりしと〜。
乗出す駿足馬上の達者。響の音は秋の野
の虫にはあらでリン〜。繪旨をや
がて頭に戴き双向ふ奴原打立て。追立て
切散し。追付け四海に羽を伸さん。いそ
ふれやつと逸散に大内山へと。三へ急ぎ
行く

同 七日の段

地播化隨縁眞實に無量の恵み洩れざれど
も。佛敵猛威の春長に世を狹められ鱧重

成。無念ながらも杉の森岩を構へゆるし
くも。寄手を防ぐ唯一心。矢叫びの音聞
の聲天地に。フシ満ちて動搖せり。地か
かる險しき其中に。媚き集ふ腰元ども軍
に馴れて氣は張弓禪。鉢巻腰刀さすがゆ
ゆしき身の備へ。フシ中に小笹が才發
顔。アイヤなう浪江。なんとマア騒がし
い世界ではないかいの。切つた〜と切
つつはつつを世渡りにまだ仕足らいで春
長殿。慶覺様を相人に取り憎てらしい軍
事。サイノウ追付け如來様の罰が當り。
首がころりと飛ぶであろと。地いへば兵
卒口々に。同ヲ、サ飛ぶとも〜。一向
一心に固まつたる我々。殊更御主人喜多
の頭様の軍配。石山に於ても度々の勝
軍。ヤモ負ける事はけんにもない事。
残り多いは王様の御挨拶。頭の役でおと
なし丸う納めて慶覺様が。石山の岩を
引拂ひ此杉の森へ御陣がへ。性懲もなく

又寄せかけた尾田の大軍。どつと寄せて
も不可思議光如來のお力にや叶ひませぬ
ぢやないかいな。あいなアあいな。ヲツ
ト待つたり。叶はぬ序においといは若
旦那孫市様。尾田と和睦が破れたばつか
りに。御使の越度ぢやと爺様の御勘當。
なんと可内。御詫びの願ひを一統に。し
て見る心はないかいやいと。地文おろお
ろ涙惣々が。吸上げたる水涕も。忠義の
はしと。フシ殊勝なり。地かくと漏れ聞
く一間より。孫市が妻の雪の谷。我が子
の手を引きしとやかに。出づる姿もおの
づから。思ひある身の打萎れほんに主な
り家來なりと。思うて優しい其方達が
志。聞く嬉しさにいと猶。悲しき夫の
お身の末。どうなる事と自らが。心の内
を推量して給やいのうとありければ。
腰元はじめ士卒ども。フシ顔見合せて詞
なし。地娘松代は母の顔。打詠め〜。

同コレ申し母様。おまへは何をむづかるぞ。同じ様に皆迄も何を泣きやる。早う父様や弟の重若を呼びまして来てくれやい。此間の清書をお目にかけて。譽めて貰ひたいわいのう。ヲ、譽めて貰ひたからう。そなたよりこの母が逢ひたさは山。暫しが間も母の傍。得離れぬあの重若。地定めて泣いてばつかりゐるである。可愛いものやと喰ひしほり。泣く音を包む雪の谷が、メテ心の内ぞ。せつなけれ。襖の彼方に重成が高らかに嘔拂ひ。扱は勇君のお出でなるぞと。いふに心得腰元が。席を下れば雜兵ども。ッシ地に鼻つけてかつ跪ひ。地待つ間程なく悠然と。立出づる饒喜多の頭。不興氣に邊りを見廻し。同ヤイ女ばら。此所に用事はない次へ立て。軍卒ども何えうつかり。要害を頼みに搦め手の守り怠るは一大事。早く罷つて心を付けよ。サ、行

け。進行けと追立てやり。同イヤナニ嫁女。そなたにも云ひ聞かし。悦ばす事があるてや。アノ私に悦ばす事があると御意遊ばすは。ム、夫孫市殿の。ハテさて。又しても不吉者の忤が事。左様の事でありない。當月二日の曉に天文の考みしをりない。東に當つて白氣自然と立昇る。これ則ち敵の大將。春長が腹心と頼む勇者の内に変心の者あつて。事を破るの前表。今日迄口外せざれども數日の籠城。お身も定めて心勞と思ふから。安堵させんため申し聞かす。見よ、追付け世を廣う。足利の正統たる慶覺君の御代となさん。何と此上もなき悦びではをりないかと。地未然の祭す明智の眼力。こなたは一途に夫思ひよき折からと。ッシ摺寄りて。同イヤもうお嬉しし段ちやござりませぬ。ガどうぞならう事なら。其白氣とやらが立ちました。孫市殿の御勘當が敵

りますといふ知らせなら。ぼんにどの様に嬉しう存じませうぞ。憚りながら慶覺様と御一所に。どうぞ世に出られます様に。地親御のお慈悲お情でと。いふを打消しアレまだしつこい。同かゝる目出たき折からに。よしなき慶言聞きたくない。お身も孫を連れて部屋へ行きやれ。て、何をぐづぐ。早く立ちやれと囁付けられ。何とせん方投首し娘松代を伴ひて。ッシを、立つて入りける。地跡に重成只一人立上つて通路の鈴。引き鳴らせば一間の御簾。さつと小娃がかぐれば念誦他事なき慶覺君。重成が音づれ何事があるやらんと。仰せにはつと頭を上げ。同今朝より御機嫌を伺ひ奉らんと存すれども。敵の朝旣け短兵急に寄せたれば軍配に暇なく。一泡吹せ味方の勝利。攻口を退き候へば。地一息の間と漸う只今御前へ伺候。不禱の段は御高免

と被ひ。フシ深く述べければ。地誠忠俊
父の一人時に合はねば。此程よりの心勞
推察せり。阿兄義輝君は三好松永が爲に
亡び給ひ。今又我は春長が爲に斯くのご
とし。地よしなき命永らへて。萬民發炭
の苦しみといひ。諸卒の命を失はんよ
り。早く我が命を斷ち。美萬死を救ひ得
させよと。御目を閉ちて稱名を。唱へ給
へば重成も君の恵みの有がた涙。胸に押
へて氣色を變へ。阿チエ、いひ甲斐なき
御仰せ。それ軍は和にあつて衆にあら
ず。馬洗厩養に等しき尾田の弱兵。何程
の事やあらん。地勳歌を上ぐるは瞬く
内。君にも知し召す如く。國大なるとい
へども戰を好めば必ず亡ぶと。阿近くは
武田勝頼。父信玄まで其威隣國に。並ぶ
者なく猛虎の如く。諸侯も恐れ候へど
も。地勇に誇り。武に慢じたる太郎勝
頼。阿累代の武名も一時に朽ちぬ。春長

とてもまつ其如く。地御心弱くて叶はじ
と諫め申せば慶覺法師。打領かせ給ひつ
つ。重成來れと御座をば立せ給へる其所
へ。大息ついで驚森八郎。御注進と手を
つけば。人々いかにと仰せの下。ソリさ
れば候軍は味方の勝利なれども。力責め
には叶はじと。數千の車に燒草を積載せ
て櫓々の其下へ。山の如くに積み重ね。
たゞ燒打ちに。ナホス云はせも立てず。
地喜多頭はつたと睨め付け。阿ヤア馬鹿
馬鹿しい。何の癡言。其刈柴こそ身が申
付けたる一つの計策。御大將の御前なる
ぞ。鹿忽の注進。早く立て。地とわざと
怒りの一言も知らで驚森八郎は。拍子拔
け。フシ投げ引きかへせば。地いざ御入
りと八方に。心を配る重成が。底意を汲
みて慶覺君奥殿さして。三重へ入り給
ふ。地夏の日の。フシ永きも我を。恨む
なる。物思へとや夕暮の。空を。待ちけ

り孫市が。肩にしつかり鎧櫃。オクリ人目
を忍ぶ陣笠の。歩にやつしたる佛は。
昔に變る。スエカ、勘當の。身は猶更に
心の隔て。何とせんかた切戸口。ハズミ佇
む。フシこなたの茂みより。地色忍び出
でたる大の男。あたりうそく親ひ足。
奥を目がけて忍び行く。後の方より孫市
が。曲者やらぬと弱腰を。むんずと組ん
で引き戻す。阿シヤ猪口才すなと振り解
き。地直ぐに抜討ち双の光。かい潜つて
抜合はし。手練の切先はつし。打合
ふ双音何事と。手燭片手に立出る雪の
谷。火影を覆ひ物陰に息を詰めてぞ守り
居る庭には二人が上段下段。飛鳥の働き
孫市が。難なく曲者斬り倒し。乘懸つ
て。フシとどめの刀。地色血ふし拭ひ刀
を鞘。納める丈夫死骸の懷中。探る手先
に取出す一書。さてはと月に透し見て。
阿ム、スリヤ當月二日に春長父子。光秀

が爲に亡びしとな。地チエ、心地よや嬉しやと悦び勇む後には。紛ふ方なき夫の聲。飛立つばかり走寄り。逢ひたかつたと縋りつき。嬉し涙ぞ先立てり。地色夫もさすが夫婦の愛情。やゝ打潤む目をしばたゝき。詞誠や飽かぬ夫婦が銘々に。悴を連れて思はぬ離別。父の勘氣を蒙りしも。暴悪非道の尾田春長。約を變ぜし故なれば。何卒彼奴が首討ち取り。親人の實檢に備へなば。勘當詫びの綱にもと。心はやたけにはやれども。地悴重若召連れては。足手纏ひと未練にも。子に引かされて送る月日。鐵砲疵にて觸さへも。思ふに任せぬ不具者。詞武運に盡きし我が身の上。せめて御主君親人のお役に立つて死なんものと。覺悟極まる今日只今。死後に頼むは二人の子供。地心得たるかと夫の詞。聞くに女房が泣出す。その口押へて。詞コリヤ親人のお耳

に入らば却つて妨げ。イデ悴を手渡しと。地かたへに直せし鐵櫃。蓋取除くれば重若が。母様なうと走出で縋り敷けば母親も。胸に涙の満潮の引くや血筋と奥よりも。姉の詞松代が聲聞きつけ。詞お父様のお歸りか。重若も戻つてか嬉しい。早う遊ばと地手を叩き悦ぶ姉弟雪の谷が。膝に引き寄せ聲くもらせ。詞ヲ、嬉しかる。何ぼう其様に悦びやつても。久しぶりでお目にかゝつた父様は。腹を切らねばならぬという。コレ孫市殿。これを見てかいのう。何にも知らぬ二人の子供。お前は可愛うござんせぬか。地此姉弟をふり向けて。死ぬる覺悟を極めたとは。餘り氣強い胸欲な。武士が立つても廢つても。死なさぬ。死なさぬと。かき口説くのも。忍び音にヲシ奥へ。憚るうき涙。道理と知れど聲に角立て。詞ヤア未練至極の其吹頬。弓矢

取る身の切腹は此身の本懐。今計らずも寄手の大將。是角六郎を討つて捨て。懐中の一書を見れば。都本能寺に於て春長父子。光秀が爲に討死と。春孝よりの報知の密書。地此騒動に寄手の奴原。一旦圍みは開くとも。再び寄せんは必定たり。危急を救ふはこの孫市。君と父との命にかはり。首を則ち久吉が陣所に送り。和を乞は。元より寛仁大度の眞柴。よもや違背は致すまじ。詞使は悴重若丸。豫て認め置いたる一書。斯くまで思ひ込んたる某。妨げなす不所存者。コリヤ二人の子供爰へ來よ。姉弟ともに父が子か又母が子か。云うて聞かさば賢い者と。地撫でつさすりつ尋ぬるも。胸に無量の思ひある。心は知らで弟の重若。詞コレ父様。私はお前の子でござるわいの。何ちや父が子ぢや。ヲ、よくいつた出かしたなア。サ、姉の松代はどうぢや

どうぢやと。地問へど年だけうぢ〜と
フシ母に氣兼ね云兼ぬれば。同ム、返事
ないは母が子か。我が子でなくば出てう
せうと。地呵り付けられ泣く〜も。同
何の母様の子ぢやござりませぬ。と、様
の子でござります。スリヤ其方も我が子
とな。ヲ、よく云つた出かしたなア。父
が子ならば。身が云ひ付ける事背きはせ
まい。アノ親の云ふ事聞かぬ者は不孝者
ぢやと母様が常々からのお呵り。どんな
事でも聞きますなる重若。そなたもい
ふ事聞きやるかヤ。アイよう云ふ事を聞
くわいのう。ヲ、扱々うい奴。然らば申
付ける役目がある。今父が此短刀を腹へ
突立てたらばな。コ、此刀と脇差にて身
が首を引切り。此一書を添へて久吉殿へ
持参せば。此上もなき孝行者。合點がい
たかと。地細やかに。云ひ教ゆれば驚く
母。脱付けられくひしはる親の心は知ら

ぬ子の。譯も七つ子重若丸。同そんなら
父様の首を此脇差で切ると。孝行になり
ますかや。ヲ、なるとも〜。日本一の
大孝心。コレ姉様も合點かや。サア早う
腹切つて下されと。地いふに堪らず母様
が。我が子引退け。同エ、忌はしい子供
ではあるわいのう。コレ孫市殿。いかに
望みが立てたいとて。何辨へない此子供
に。親を殺せと教へる人が。又と世界に
あらうかいのう。地夫や我が子を安穩に
置きたいばつかりに兎や角と。心を盡す
女房を思はぬ仕方方情ない。親の別れも身
の科も辨へ知らぬ佛様。鬼にせうとは胴
欲なせめて此子が生先を。見届ける迄生
きて居て下さりますが親の慈悲。頼むわ
いのとばかりにて譯も。詞も涙川膝に漲
る風情なり。同ヤア益なき練言聞きたく
ない。三千世界に子を思はぬ。親があら
うか白癡者。左程悴に此首を討たし難く

思ひなば。子供に代つて介錯せよ。サア
それは。得心なくば縁切らうか。ぢやと
いうて是がマア。ヤア未練至極の其吠え
頼所詮介錯思ひも寄らず。見下げ果てた
る女めと。地取つて引寄せ提緒の早繩。
庭木の杉にしつかりと。フシ結ぶ妹脊の
亂れ口。文編こがる、其身は梢の猿。腸
を断つ憂き。ナホス思ひ。オキ母の有様見
るよりも。二人の子供はおろ〜顔。同
コレ〜松代。重若も父様の兩の手に取
付いて居やや。必ず放して給るなど。地
あせれど夢か。フシ現なき。地夫は今を
最期ぞと。諸肌脱げば弟の重若。同父様
もうかや。ヲ、サ今が親への孝行時と。
地云ひつゝ短刀我が腹へぐつと立てばは
つと散る。唐紅に目も眩み心も消ゆる
雪の谷が。闇路を辿る思ひにて。フシ正
體。もなく伏沈む。地歎きの折も一間よ
り。同ヤレ悴其刀引廻すな。云ふ事あり

と父重成。地しづ〜と立出で。 詞ホ、
適れ忠臣よくしたり。今こそ勘當赦してく
れる。是を此世の思出に。心靜に寿命
をとげよ。とは云ひながら二人の孫。親
の死別も夢現。さぞ成人の其後は。歎く
であらう悔み居らうと。思へば不便彌増
して。地我は老木の末近く。便りとする
は母の親。むごい祖父ぢやとコリヤ恨ん
でばしくれるなよ。地我とても骨肉の悴
を見殺す胸の内。どの様にあらうと思
ふぞいやい。地チエ、是非もなき次第や
と。胸に湯玉の涌返る。親の思ひの有難
涙見上げ。見おろす。地一世の別れ。
手負ひは涙押し止め。地ハ、有難き父の恵
み。忠孝全く望みは足りぬ。サア重若松
代。最前父が申付けたる役目は只今。サ
早く。早く〜。コレ〜必ず切るまじ。
切つたらば母が我を握ゆるぞやと。地稱
せばさすが子心に。控ゆる手先。地ヤア

詞背くと子でないぞ。エ、父様の御用を
聞くと母様が呵らしやる。その母様は
あの様に縛られて居やつしやる。コレ重
若。かゝ様のアノ繩を解いて上げてたも
いのう。サアそれでもあの様に白眼しや
るもの。ヲ、何ぼう呵らしやつても大事
ない。この繩解いて給いのう。コレ申し
勇御様。同じ様に脇見せずとなぜ止めて
下さりませぬぞ。現在孫を親殺しにする
が情か慈悲かいのう。地此繩といて下さ
れと。頼む嫁より頼まるゝ。男が胸の苦
しさを。堪ゆる辛さ。澁面は。涙に。増る
思ひなり。地色斯くては果てじと孫市
は。我が子の腕先持添へて。しつかと當
つれば頭はなく。ともに力身で。地と
様斯うかや。ヲ、さうぢや出かす。地出
かすも一世の別れ。二世の名残と雪の谷
が。消ゆる間を待つ夫の命。神も佛もな
い事かと。亂るゝ心亂れ髪血汐争ふ血の

涙。上には父が稱名の。聲諸共に。鈴
の音。慶覺君は他念なく。南無阿彌陀佛。
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛の回向の。恩
徳廣大。不思議にて往相回向の利益には
還相回向に回入せり。聲は如來の迎ひぞ
と。えい〜と孫市が。地シカ、リ首
は前にぞ落ちにけり。わつと恐れて飛退
く子供。母は其儘打倒れ。スエテ前後不覺
に。泣き叫ぶ。地始終見届け重成が。目
に持つ涙押し拭ひ。地ハ、生者必滅の理
今目の前に見るも夢。せめて夫の切首
に。地暇乞ひをと立上り。 繩解きは
どけば雪の谷は。其儘首にしがみ付き。
地覺悟故とは云ひながら。いとし可愛の
姉弟に。嗚や心が残るである。魂魄去ら
ずば今一度。物云うてたべ孫市殿。地我
が夫なうと押動かし。盡きぬ名残の百千
行。聲を限りに泣き叫べば。地ヲ、其歎
きは理ながら。主君へ忠死の悴が功。

出かしをつたと掣めそやす。親が心を推量せよ。地不便とばかり詞數。いはぬ心のせつなさを。思ひやつたる雪の谷が。正體涙の聲を上げ。國家を忘れ身を忘れ討死するは武士の。習ひと覺悟しながらも。得諦めぬは女だけお赦しなされて下さりませ。地永い別れと知らぬ子の常の遊びか何ぞの様に。親の首をばむごらしい。阿切が手柄になるといふ教へは外に情ない。地如何なる宿世の報いぞと口説き立てたる恩愛の。心は一つ重成も。隣き繁くはら〜。涙は雨か夕立の。フシ車軸を。飛ばす如くなり。地色折しも吹來る風に連れ響く。貝鐘攻鼓。又も敵や寄するかと。驚く雪の谷騒がぬ老人。思ひがけなく彼所より。阿足利の正統たる慶覺君を御迎ひの爲。中川清秀参上せりと。地呼はり〜。フシ入來る清秀。地喜多の頭はくわつとせき立ち。阿

ヤア和議を破りし無道の春長。其敵を喰ひ中川潮平。納め過ぎたる上下衣服。御迎ひとは何の癡言。ホ、一旦の憤りは尤も至極。此度の合戦は御舍弟春孝殿。事を計りし禮を亂す。さるによつて眞契久吉。内意をもつて立越えしは。密に都へ供奉せん爲。地早や御用意といはせも立てず。阿逆賊光秀が爲に自滅せし春長父子。知るまいと思ふかや。石山方に名を得たる體喜多の頭重成。眼は日月。及ばぬ事をと。フシきめつくれば。地清秀猶も詞をつくし。阿成程推量の如く當月二日。都本能寺に於て主君の横死。愁ひに沈む我々。偽りのあるべきや。とりわけ子息孫市殿。死を以て久吉殿へ願ひの一條。地今より一子重若丸父の忠義を頭に戴き。二代の體孫市と名も改まる兩家の和睦。阿慶覺君の御本願照すも法の道廣く。やがて目出たき榮えをと。地情の詞

に疑念も散じ。ハ、誤つたり〜。阿斯程厚志の眞契中川。悴が願ひ我が君の。法の門出一時に開け。此上もなき我が悦び。コレ〜嫁女。孫が手柄は二代の忠臣。歎きの中の悦びと。地勇の詞聞くにつけ。いと涙に雪の谷が應答も。フシ更に泣くばかり。地フシ早や御立ちの刻限と。追々警固の諸軍勢。コハリ見るより重成手を打つて。阿萬事に馴れし清秀殿。イデ我が君へこの様子申上げんと立上れば。イ、ヤ聞く迄もなし。とくより慶覺これにありと。地しづ〜と立出で給へば。はつと恐るゝ二人の勇士。慶覺君は御衣の袖絞り給ひていかに方々。阿孫市が忠死により萬死を出でしも佛の恵み。久吉が情の計ひ。又清秀とやらんが志。地邊分至極と宜へば。清秀なほも敬ひ深く。阿コハ有難き君の御説。此上は御心置きなく早や鷄鳴に程近し。いざ御發駕

と 地勤めに君は。フシ下り立ち給へば。阿ヤレ暫く。御門出を壽ぎの孫めが一さし。御上覽に入れ奉らん。嫁女。常教へし扇の一手早く。早くと舅の詞。地フシ深ながらに。*、*取上ぐる。鼓の調べ重若が。詞祖父様。語をうたうてやと。地扇をしやんと。身の備へ。舅あら目出たや末廣の。君の榮えは。馬萬々歳と祝しけり。拍子につれて稚子の奏で。祝する末廣の。其一曲は末の世に。名を止めたる鐘が踊り。フシ因縁斯くと知られたり。地いざ御立ちと清秀が。詞に。ふり出す。行列の。おさへは二代の鐘孫市。武士の鑑となる鐘の音諸共にあけて行く。夜もしらくと白鷺の森を離れて。飛び交ふも。君の榮えを白鳥の。神の擁護と勇み立ち都の。空へと 三原供奉しけり

同 八日の段

地潤むべし。英雄の武將刃の霜と消えて行く。内大臣春長公今日一七日の大法事と。老若男女別ちなく。フシ參詣群集を當てにして見せ物。輕業力持ち戦國の世も下々の。フシ身過ぎに變りなかりける。地所の百姓引連れてのさく来る陣張甚助。茶屋が床几に腰打ちかけ。阿ヤレ庄屋太郎作とやら。此度尾田春長の法事は。主人武智左馬之介様の御持圖。情を以て萬事御宥免あれば。付上がりのした百姓ども。誰が赦して。輕業ちやの。イヤ曲持のと。仰々しい振舞ひ。外は格別。當村は此陣張甚助が支配。立てうと伏せうと身ども次第。小家掛け茶屋に至る迄。今日中に取拂へと。地主の威光に肩臂張り。フシさも横柄に罵れば。地庄や太郎作頭を搔き。阿其お腹立は御尤もでござりますれど。又してもく。エイエイわあで村々は亂が騒ぎ。此頃武智光秀様。將軍とやらにお成りなされ。少しこゝら近邊は穩か。其悦びの參詣群集。せめて四五日御用捨をと。地いひつゝ腰の早道より。取出す小錢茶碗にうつし。マアお一つと差出せば。手に取上げて悔りし。睨んだ眼は何所へやら。ぐわらりとフシ變る機關的。阿へ、ハ、ハ、ハ、イヤなに庄屋。ソリヤ何かいよいよ主人光秀公が天下を知し召す。其御悦びとあれば苦しいく。輕業なりと。唐の芝居なりと勝手次第。拙者元來茶が好きだが。大服にして換へてくれる氣はないかと。地肩からはえた。瓜長代官。百姓どもは口揃へ。地何がさてく。何杯なりと御遠慮なしに。お換へなされて下さりませ。然らばどうぞ今一ぱい。所望所望と差出され。地めいく紙入れ巾著

を凌へて漸う八分目。少し少なからと差出せば。詞これは〜重々の御馳走。

いやもう此お茶さへ下さらば。少々は拙者の頭で。土佐踊りなされても苦しからず。用事あらば承らん。必ず心置かれなと。地慾に目のないにこ〜笑顔。サア

してやつたと百姓ども。庄屋を先に立上り。詞又もや御意の變らぬ内。代官株へ差上ぐる。地出端の錢を儲けうと。挨拶

フシそこ〜。立歸る。地あとに甚助只一人。オナリ燦らす。煙草の煙より胸に。思

ひの。フシカ、リ絶間なき。タ、キおこぶは後にもち〜うぢ〜。ドリヤまからう

と立上り。歩みかゝればこらへ兼ね。申し〜と呼びかくれば。甚助あたりを見廻して。詞ハテ心得ぬ。柳の小陰より申

し〜と呼びかけるは。夜鷹さんかいな。アイナ。あいなと走り出で。地恥か

しさうに縄付き。いはんと。フシすれど

赤らむ顔。地甚助はためつすがめつ。お

こぶが姿を眺め入り。詞見れば本肉の仕事盛り。身どもに取付きこたれるは。仔細ぞあらん物語れ。つひに見えぬ御妻殿

と。地いはれて漸う顔を上げ。詞エ、つひに見ぬとは聞えませぬ。地去年の五月の夕まぐれ。道頓堀の奈良茶屋で。思ひ初

めたが縁のはし。丸寝の。盆屋は丸清の二階。千年も萬年も。變らぬ契り龜竹の節々までが萎る程。地愉快かつた床の海。

音はぎし。〜。岸本や人の噂に鳴戸屋を。ほんに嬉しの森新で。私や悦んでゐるものを。それにお前は揚物屋の荷箱か

大正の鰻の様に。ぬらくらとしたぬめた様。ナオス忘れるるとは餘りな。聞えぬわ

いなと取りついて恨みのたけを口説き立て。啜上げたる有様は。達磨の畫像に野良猫の。フシそばへか〜りし。ごとくな

り。地甚助道理と背撫でさすり。詞一々

心に覺えの合ひ紋。顔見忘れたは悪かつ

た。幸ひおれも徒然の砌。アノ水茶屋へサアおぢやと。地いはれておこぶもぞつ

く〜。渡りに船と帆柱を。か〜へて戀の港入り。フシ打ちつれ立つて歩み行く。地流るゝ水の。音さへも。物騒が

しき戦國に。行儀亂さぬ生立は。武智が一子十次郎人目を忍ぶ深編笠。フシ松原

傳ひに歩み來て。地有合ふ床几に腰打掛け。詞ハア、思ひ廻せば恐ろしき世の亂

れ。地昨日の君臣は今日の怨敵。親は子を討ち子は親に。刃を合す修羅の巷。是非もなき世のヌエテ有様と暫し思ひに惱み

けり。地漸う心取直し。父光秀が刃にかかり空しくならせ給うたる。春長公の靈前へ。御許容なくとも後世の爲。フシイ

デ拜せんとさしかゝる。地道を遮る陣張甚助。家來引具し大音聲。詞ヤア主殺しの武智が悴そこ動くな。汝が家來と偽り

し某こそ真柴方。久吉様への奉公始め腕を廻せと誓めければ。ハ、ハ、ハ、久吉方へ

裏切りの二股武士の甚助め。腕立して怪我まくるなど。股立。フシ取つて身構へたり。

四ヤア猪口才な小童め。物な言はせず討取れと。地いふより早く一同に切つてかゝりし又の稻妻。フシ暫し時をぞ

移しける。地いらつて切込む甚助が又物からりと打落し。付入るさそく十次郎。

フシ切伏せ〜とどめの又。地相手なければこれ迄と衣紋。繕ひ又を鞘。納める不敵の十次郎。是より直ぐに婆様の。御隠

居所へ發足し。此身の出陣お願ひ申し。敵の奴原駈立て。確立して寄手を惱まし。

屍は修羅の巻に曝し。武士の本意を達せんと勇み立つたる若木の花。ハ、ハ、あたら

盛りの春も見ず憂きを。都の假住居跡に見なして 三童

同 九日の段

地徳は咎徹に勝ち仁は凶邪を除くとかや。されは眞柴久吉中國の大敵を攻め討

たんと。水を以て手をぬらさず忽ち和睦相調ひ。大物の浦に。フシ著陣ある武名の。程ぞ類ひなき。地加藤正清進み出で。

信長といふ鬼の再来と。性ぢ恐れし春長公を討取つたる逆賊の武智光秀。一時も

早く都に攻入り。捻り殺すが君へ追善。地早や御用意とせり立つれば。久吉莞爾と打笑ひ。

四今に始めぬ清正が勇言ヲ、心地よし〜。さりながら此久吉中國に發向せば。都に足を入れぬ内伏勢を以て

討取らんと。武智が結構顯然たり。迂濶に上京なす時は過つて死地に入らん。必

ず油斷致すなど。地軍慮に敏き久吉が詞にあつと諸軍勢。フシ英智を感するばかりなり。

地色折節ひよか〜瀆つたひ。

フシ藁春片手に百姓長兵衛。旅僧一人引連れてフシ咄し交くら行過ぐる。地軍兵どもは聲をかけ。四ヤイ〜土民蛸坊主。眞

柴筑前守久吉様の御前とも憚らずのさばり歩く横道者。控へをらうと咎められ。

ア、そんなら久吉様はそこにごさるか。お坊茨ちやとやい。ヤレ〜嬉しや〜。

マア一服ませうと藁春どつさり。フツ高胡坐。四ヤイ〜まだぞんざいな蛆虫

めら。ア、コレ〜其様にけん〜いはんすな。久吉様のお目に掛つたら。

さつぱり譯が分るものぢや。ナウお坊。成程左様。大坂今里村の長兵衛。江州の

觀音寺の僧懸穴が参りましたと。おつしやつて下さりませ。ヤア長兵衛でもけれ

ん穴でも。對面なさる用事はない。きりきり立てと争ふ軍卒。地眞柴久吉御聲か

け。四某に對面せんとは仔細ぢあらん。地これへ通せと御仰せ。ハツト恐れて兩

僧を引戻し、ぐつと一締めかたへに投退なげかえけ。百姓長兵衛とは偽り。誠は武智光秀の舊臣四王天田島の頭。止とどめやつと聲掛けられ。地頭巾ぢま振ふりぐつと詰掛け。

同さすがの久吉よく察した。汝を偽り誘まよき寄せ討取らんと計りしに。見顯みけんはされて残念至極と。地いふより早く薬包くすりづかに。

隠かくせし薬物くすりもの拔放し。久吉目が切付くれば。ソリヤ通すなと軍兵ども。群り寄つて突つかゝる。鎧よろいの穂先ほのさきは篠薄しのうす、薙立はげだてて切結きむすぶ。勇猛不敵ゆうめいふてきの四王天。乾達婆けんだつぱ王の荒れたる如く突伏せ切伏せ駈上れば。

あしらひ兼ねたる眞柴方。フシ度を失うて見えにける。地久吉も心を配り味方の勝利覺束なしと。有合ふ僧の袈裟衣手早やに取つて我が身に著し。馬にひらりと飛乗つて。濱手の方へ只一騎駈出す向うへ四王天。それと見るより繰出す穂先。得たりとかはし逸散に胸を早めて駈けり行

く。ヤア汚きたし返せ猿寇者めと跡を。慕うて。三度追うて行く。地田畑たは畔道はたみち嫌ひな追驅おしけ追詰おしめ四王天。額に無念の息煙いきえん立ち勢ひ込んで駈け廻る。遙かにそれと加藤正清躍り上つて田島の頭。觀念せよと切込む太刀。心得たりと。コハリ渡り合ひ。雙方劣らぬ勇猛力火花を散らして戦ひしが。ナメいらつて打込む正清が凡人ならぬ希代の切先。あしらひ兼ねて四王天漂ふ所を切伏せ。主人の安否やすひ氣遣きぢひと跡に。三度さんどかり見なして。フシ走り行く。地さしも勇氣の田島の頭。數ヶ所の深手に踏ふひ。チエ、残念や。

斯く近手に入る眞柴久吉討渡らし。それのみならずむざくと。名ある勇者の首をも取らず。討死するか口惜しやな。思ひ廻せば廻す程。運の強き猿寇者め。此土をはづれいつか又彼奴を討取る期やあらん。地無念々々といひ死に。こゝに名

のみを残したる。田島の頭が身の果ての哀れなりける。三度

同 十日の段

同南無妙法蓮華經なむみょうぼうれんげきやう。地フシ御法の聲も媚なまきし尼が崎さきの片邊り。誰が住む家とゆふ顔も。おのが健なる軒のつま。あたり近所の百姓ども。茶碗片手に。フシ高咄たかばな。同なる婆様。こな様も見たところ。上方かみかたで歴々のお衆さうなが。何の爲に面白うもない此在所へはござつたぞいの。ア、コレ。甚作しんさくそりや言やんな。

京の町は武智といふ悪人が。春長様を殺して大騒動。大かた又下へつておやしやる久吉殿が戻つて来て。武智と是非に一合戦なけりや濟まぬわいの。そんなら年寄はうか。京の町には居られぬ兎角危あやげのない様にこんな在所へ来てゐるが大出来。時に近付きがたら妙見講

を勤めるとはよい手廻し。大きな馳走に
逢ひました。これから随分お互にお心安
ら致しませう。地サア〜往なうと口々
に。いひたい事をたくしかけ。ッシ喋り廻
つて歸りける。地老母はつど〜門送り
小オクリ庭の千草に打つ水もハズミたもつ
葉毎に。風かをる。軒を目當てに。来る
人は武智が闇に咲く花の操の前は家來を
遠ざけ。嫁の初菊伴うて親ふ切戸の庭先
に。ッシ花に心を。養ふ老女。地それと
見るより手をつかへ。同後室様の見舞と
して。只今参上致せしと。地慇懃に相述
ぶる。詞に老女は打笑み。同ヲ、珍らし
い嫁女孫嫁。遙々の道よろこそ〜。さ
りながら悴光秀。當月二日本能寺にて。
主君を害せし無法者。同し館に膝並ぶる
も。先祖の恥辱身の穢れと。地館を捨て
て此在所へ身退きし此婆を。同見舞とは
をこがましい。善にもせよ悪にもせよ。

夫に付くが女の道。操の前は武智十兵衛
光秀が妻。そなたは又孫の十次郎光義が
嫁でないか。生死わかぬ戰場へ。地
赴く夫を打捨てて浮世を捨てた姑に。
孝行盡すは道が違ふ。同妻城に留まつ
て。留守を守るが肝要ぞや。モウ寡婦暮
しの樂しみには。夕種棚の下涼み。地捨
つべき物は弓矢ぞと。いひ放したる老女
の一徹。ッシ跡は詞もなかりけり。地常
の氣質と逆らはす。詞いかさま後室様の
仰やる通り。此様に只お一人でござつた
ら。何もかも氣散じで。マア第一はお身
の養生。地今から私も初菊も後室様のお
傍に居て。飯も焚いたり茶も沸し。お官
仕へをせうぞいのと。有合ふ前垂れ打掛
の上に引締め茶釜の傍。端香の籠る姑
の。しぶ〜機嫌を取兼ねる娘心に初菊
も。マどう濟む事か濁り井の。深き奇縁
の釣瓶繩。ッシ水汲み上げんと立寄れ

ば。詞コレ〜嫁達。シテ孫十次郎は。
城に残つて居めさるかさればでござりま
す。十次郎が願ひには。どうぞけふの軍
に。高名手柄が願はしたいと。父上迄は
願ひしかど。婆様のお赦しなきに出陣す
るも本意でなし。母に取次してくれと。
くれ〜の願ひ故。地餘り健氣さ祖母様
に御機嫌の程いかゞぞと。伺ひに参りま
したと語る内。老母は涙をはら〜と流
し。同ヲ、煩さの嫁が物語り。主を討つ
たる逆賊の邪。非道の軍の評定。聞くが
厭さの此住居。ガ又孫を譽めるではなけ
れども。非道な悴光秀が子に。十次郎と
いふ武士が。生れて來るとは是も因縁悔
んで返らず。戰場の事聞きたうない。ア
いや〜情なの浮世やと。地無量の思ひ
百八の。ッシ數珠爪繰つて居たりける。
地色折節表へ草鞋がけ。風呂敷背に息せ
き虹飛込む道の遠の。オクリ清水。掬はん夏

の旅。西行もどきの僧一人、フシ門口に立ち休らひ。諸國修業の一人旅。近頃申し兼ねたれど御宿の報酬に預りたし。地押付けながらといひ入れる聲を老母が聞取つて。目見苦しうござりますれど。お心置きなう御一宿。それは千萬忝ない。左様ならば御遠慮なしに御免。地御免とあがり口腰打ちかくれば二人の女。草鞋の。フシ紐を解きかくれば。阿ア、勿體ない。構うて下さりませぬ。放しつけた坊主の氣散じ。木納屋の隅でもついこり。蚊帳も蒲團もいりませぬ。お心遣ひ御無用と。地詞半へ表口。人目を忍び只一騎。窺ひ立聞く武智光秀。心得がたき旅僧と。生垣押分け差覗き。思はず見合す母の顔。老母は何か心に點頭き。阿ヲ、わしとした事が心の付かぬ。コレ御出家様。此板圍ひが則ち風呂場。水は幸ひ汲んであり。ついばやくと燃して。暑

い時分ちや行水して休んで下さりませ。婆も跡で相伴しませう。ア、イヤそれは及びませぬぞ。相伴とあれば沸しませう。そんなら御免なされませと。地包み提げ氣散じに。フシ湯殿をさして入りける。地味方の軍卒兩手をつき。阿御子息。十次郎光義様。後室様に御願ひの筋ありと。只今はへ御越しと。地いふ間程なく静々と。家來に持たせし鎧櫃。フシ昇入れさせて打通り。阿コリヤ、者ども其方達に用事はない。陣所へ早くと追つ立てやり。地威儀を正して兩手をつき。阿母様を以て御願ひ申せし出陣。御聞届け下されなば。地武士の本意と十次郎思ひ。フシ込んでぞ願ひける。地老母は見るより機嫌顔。阿ヲ、珍らしい十次郎。出陣の願ひとな。悴を見限り此所へ。身退きしに叮嚀な願ひの筋。最前嫁女に詳しう聞きました。とても出陣しやるなら。

祖母が願ひはこの初菊。今宵この家で祝言の。盃してから門出しや。何と嫁女嬉しいか。地と老の詞に初菊は。飛立つばかり氣もいそぐ。心の悦び穂に出づる。顔は上氣の夏楓色も媚めくばかりなり。地色只黙然と十次郎。今日初陣に討りと。覺悟極めし此體。お暇乞ひに参りしと。知らせ給はぬ悲しやと。ホッソ涙。呑込み忍び泣き。地色操の前も立上り。祖母様の御機嫌の變らぬうちに固めの盃。阿ヲ、それ。孫も大かた心せき操は九獻の用意しや。十次郎が初陣の。鎧の役はすぐに花嫁。地三國一の悲しみと。知らぬ白齒の孫嫁が。手を引連れて。三人は。オトリ奥の間へ入りけり。地残る者の花一つ。水上げかねし風情にて思案。投首萎るゝばかり。フシ漸う。涙押し止め。阿母様にも祖母様にも。これ今生の暇乞ひ。此身の願ひ叶うたれば。思ひ置

く事更になし。地十八年が其間御恩は海
山かへがたし。討死するは武士の習ひと
思召し分かれて。さき立つ不孝は赦し
て給へ。阿二つには又初菊殿。まだ祝言
の盃をせぬが互の身の仕合せ。わしが事
は思ひ切り。他家へ縁付きして下され。

地討死と聞くならばさこそ歎かんと不便や
と。孝と戀との思ひの海隔つ一間に初菊
が。立聞く涙轉出で。スエテわつとばかり
に。泣出せば。地はつと驚き口に手を當
て。阿ア、コレく聲が高い初菊殿。扱
は様子を。アイ。残らず聞いて居りまし
た。地夫の討死遊ばすを妻が知らないで何
とせう。二世も三世も女夫ぢやと思つて
ゐるに情ない盃せぬが仕合せとは。餘り
聞えぬ光義様。祝言さへも濟まぬ内討死
とは曲がない。わしや何ぼうでも殺しは
せぬ。思ひ止つて給はれと縋り歎けば。
阿ア、コレ方も武士の娘ぢやないか。

十次郎が討死は豫ての覺悟。祖母様に泣
顔見せ。もし悟られたら未來永々縁切る
ぞや。エ、サアとかういふ内時刻が延
びる。其鑑櫃こへへ。アイ。アイ。
サ早う。時延びる程不覺の元。聞分けな
いと呵られて。地いといふ夫が討死の。
首途の物具付けるのがどう急がるゝもの
ぞいのと。タ、泣くく取出す緋緘の。
鑑の袖に降りかゝる。雨か涙の母親は。
白木に土器白髪はくはつの婆。長柄の鏡子蝶
花形首途を祝ふ厨斗昆布オウチ結ぶは。
親と小手鷹當。六具固むる三々九度。此
世の縁や割小札。猪首に著なす鍔形の。
あたり眩ゆき出立は。爽かなりし。フッ
其骨柄。阿ア、通れ武者振り勇ましし。
高名手柄を見る様な。祝言と出陣を一所
の盃。サアく早う。目出たいく嫁御
寮と。地悦ぶ程猶いや増す名残。こんな
殿御を持ちながらこれが別れの盃かと。

悲しき隠す笑ひ顔随分お手柄高名して。
せめて今宵は凱陣をと。跡は得いはず喰
ひしばる。胸は八千代の玉椿散りて。は
かなき。フシ心根を。地色察しやつたる十
次郎包む涙の忍びの緒。フシしぼり。かね
たるばかりなり。フシ哀れを。こゝに吹
送る。風が持てくる攻太鼓。氣を取直し
突立ち上り。いづれもさらばといひ捨て
て。地思ひ切つたる鑑の袖ハハミフシ行方知
らずなりにけり。地ナウ悲しやと泣入る
初菊。母も操も顔見合せ。阿ばく様嫁。
女。可愛いやあつたら武士を。むざく
殺しにやりました。ナウ初菊。十次郎が討
死の出陣とは知りながら。なま中止めて
主殺しの憂き死耻を曝さうより。健氣な
討死させん爲。地祝言によそへて盃をさ
したのは。暇乞ひやら二つには心残りの
ないやうと。思ひ餘つた三々九度。ばく
が心のせつなさを推量しやとばかりに

て。始めて明かす老母の節義。聞く初菊も母親も一度にどうど。伏しまろび。フシ前後。不覺に泣き叫ぶ。地色襖押明け何氣なうつか／＼出づる以前の旅僧。何コレ／＼かみ様。風呂の湯が沸きました。どなたぞおはひりなされませと。地いふに此方は泣顔隠し。何ア、それは御苦勞ながら。年寄に新湯は毒。跡は若い女子ども。マアお先へ御出家から。いかさま湯の辭儀は水とやら。左様ならば御遠慮なし。お先へ参ると。地立上れば。三人は涙押包み。ホッ奥の佛間と湯殿口入るや。月漏る片庇。妾にかり取る眞柴垣。夕顔棚の此方より。顯はれ出でたる武智光秀。必定久吉此内に忍び居るこそ。究竟一。只一討ちと氣は張弓。心は矢竹藪垣の。見越しの竹を引つそぎ鐘。小田の蛙の啼く音をば止めて敵に悟られじと。差足拔足。フシ窺ひ寄り。聞ゆる物音心得

たりと突込む手練の鐘先に。わつと玉ぎる女の泣聲。合點行かずと引出す手負り。地色聲聞付けて駈け出る操初菊諸共



ひ。眞柴にあらで眞實の。母のさつきが七轉八倒。何アこは母人かしなしたり。地残念至極とばかりにて。さすがのい敷くまい。内大臣春長といふ。主君を走り出で。ナウ母様か情ない。此有様は何事と緋り敷けば目を見開き。何敷くまい。主君を

害せし武智が一类。かく成果つるは理の當然。系圖正しき我が家を。逆賊非道の名に穢す。不孝者とも悪人とも。譬へがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲。

地主君を討つて高名頗。天子將軍になつたとて。野末の小家の非人にも。劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ。仁義忠孝の道さへ立てば。物相飯の切米も。百萬石に。フシ優るぞや。地おのれが心只一つで。驗は目前これを見よ。武士の命を斷つ。刃も多いに此様な。引つそぎ竹の猪突鎗。主を殺したる天罰の報いは親にも此通りと。鎗の穂先に手をかけて扶り苦しむ氣文の手負。妻は涙に咽せ返り。阿コレ見給へ光秀殿。地軍の首途にくれくも。お諫め申した其時に。思ひ止つて給はらば斯うした歎きはあるまいに。知らぬ事とはいひながら現在母御を手にかけて。殺すといふは何事ぞ。せめて母

御の御最期に善心に立歸ると。たつた一言聞かして給へ。拜むわいのと手を合し。諫めつ泣い一つ筋に夫を思ふ恨み泣き。操の鏡曇りなき涙に。フシ誠あらはせり。地色光秀は聲あらうげ。阿ヤア猪口才な諫言だて。無益の舌の根動かすな。遺恨を重ねる尾田春長。勿論三代相恩の主君でなく。我が諫めを用ひずして神社佛閣を破却し。惡逆日々増長すれば。武門のならひ天下の爲。討取つたるは我が器量。武王は殷の紂王を討ち。北條義時は帝を洗し奉る。和漢俱に無道の君を弑するは。民を安むる英傑の志。女童の知る事ならず。地退り居らうと光秀が。一心變ぜぬ勇氣の眼色。取付く。フシ島もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓。耳をつらぬく金鼓の響あはやと見やる表口。數ヶ所の手疵に血は瀧津瀬。刀を杖に踰びひく。立歸つたる武智が一子。

庭先に大息つき。親人これにおはするやと。地いふも苦しき斷末魔。見るに驚く母親より。娘は傍に走寄りなう痛はしや十次郎様。ばく様といひお前迄この有様は情ない。お心儘かに持つて給べきいのくくと取付いて。ヌエテ介抱如才。泣くばかり。地光秀わざと聲荒らげ。阿ヤア不覺なり十次郎。仔細は何と。様子はいかに。具に語れと呼はれば。阿はつと心を取直し。阿親人の指圖に任せ手勢すがつて三千餘騎。濱手の方に陣所をかため。今や歸國と相待つ所に。地敵はそれとも白浪の。櫓を押し切つて陸地に漕付け。阿追ひく都へ馳せ上る。眞柴の軍勢ござんなれと。地聞をつくつて味方の軍兵縦横無盡になぎ立つれば。不意を打たれて敵は敗亡。狼狽へ騒ぐを追立て。追詰め。こゝを先途と戦ふ内。後の方より大音上げ。眞柴筑前守久吉の家臣加藤

正清これにあり。逆賊武智が小童ども目
に物見せてくれんずと。いふより早く太
刀抜きかさし。四角八面に切立てられ。

瞬く間に味方の軍卒。残らず討死仕り。

無念ながらも只一騎立歸つて候と、シ息

續ぎ。あへず物語れば。光秀怒りの髪

逆立ち。ヤア云ひがひなき味方の奴ば

ら。シテ四王天田島の頭は。さん候四王

天は。目ざすは久吉一人と。昨朝よりの

一騎がけ。亂軍なれば生死の程も。儲か

にそれと承はらず。親人の御身の上心に

かゝり候故。未練にも敵を切抜け。是迄

落延び歸りしぞや。此所に御座あつては

危ふし。一時も早く本國へ。引取り

給へサ早く。と。深手を屈せず爺

親を。氣遣ふ孫の孝行心。聞くに老母は

せきかねてアレあれを聞きや嫁女。其身

の手疵は苦にもせず。極悪人の悴めを。

大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀。子は不

便にないか。可愛いとは思はぬかやい。

おのれが只一つで。地とし可愛い初

孫を忠と義心に健氣なる。討死でもさす

事か。逆賊無道の名を穢し。殺すは何の

因果ぞとせぐり苦しき老の身の。聲聞き

付けて十次郎。ヤアそんなら祖母様に

は。御生害遊ばしたか。今生のお暇乞。

今一度お顔が見たけれど。もう目が見え

ぬ父上母様初菊殿。地名残惜しやと手を

取つて。妹脊の別れ愛著の道に引かるゝ

いぢらしさ。母は涙に正體なく。討死す

るも武士の習ひといへど情ない。十八

年の春秋を刃の中に人と成り。いつ樂し

みの際もなう弓矢の道に日をゆだね。今

朝の首途の其時にも母様今日の初陣に。

通れ。高名手柄して。父上や祖母様に譽

めらるゝのが樂しみと。地につと笑うた

其顔がわしや幻にちらつて得忘れぬ

と口説き立て。口説き立つれば初菊も。

ほんに思へば此身程はかない者が世にあ

らうか。とけて逢ふ夜のきぬゝも永き

名残の許嫁。二世を結ぶの枕さへ。かは

す間もなう此様な。悲しい別れをする事

はマどうした罪か情ない。わたしも一所

に殺してたべ死にたいわいなと身を悶

え。互に手を取りかはし名残り涙の暇乞。

見るに目もくれ心消え母も老母も聲を上

げわつとばかりに取亂せば。さすが勇氣

の光秀も親の慈悲心子ゆゑの間。輪廻の

縁に締めつけられ堪へかねてはらゝ

雨か涙の。汐境。浪立ち。騒ぐ

如くなり。地色又も聞ゆる人馬の物音。

矢叫びの聲。オクリ手に取る。フシ

へ如く聞ゆれば。地色光秀聞くより突立

ち上り。アノ物音は敵か味方か。勝利

如何にと庭先の。すね木の松が枝踏み

しめゝよち登り。眼下の村手をきつと

見下し。和田の岬の左手より追々つど

く數多の兵船。間近く立つたる魚鱗の備へ。千生瓢の馬印は。疑ひもなき眞柴久吉。風をくらつて此家を逃げ延び。手勢引具し光秀を討取る術と覺えたりと。いふより早く。フシひらりと飛び下り。草履掴みの猿面冠者。いで一挫ぎと身繕ひ。フシ勢ひ込んでかけ出せば。ア〜武智光秀暫く待て。眞柴筑前守久吉對面せんと呼はつて。三衣に代る陣羽織。江戸小手懸當も優美の骨柄。悠然として立出づれば。地光秀見るより仰天し。駈戻つてはつたと睨み。眞ヤ珍らしし眞柴久吉。武智十兵衛光秀が。此世の引導渡してくれん。觀念せよと。地詰寄る光秀。中を隔つる老鳥の子故に手拭屈せぬ老女。なう久吉様。我が子に代る此母も。天命遇れぬ引つそぎ鐘。作りし罪の萬分一亡ぶる事もあらうかと。思ひ餘つた此最期。武智が母は逆

礫にかゝつて無慚の死を遂げしと。末世の記録に残して給へ。地それもやつぱり粹めが。可愛さ故の罪亡し。圓うるさの娑婆に残らんより。孫と一緒に死出三途。ハアわたしもお供致しますする。いづれもさらば。おさらばと。地未練残さぬ武士の。花も實もある此世の別れ。今ぞ果なくなりにけり。操の前も初菊も更に詞も出でばこそ。あへなき骸を推動かし天にあこがれ地に伏して歎く。心ぞいぢらしき。地色衰れを餘所に眞柴久吉。光秀に打向ひ。眞柴君の弔ひ軍。今此所で討取つては義あつて勇を失ふ道理。諸國の武士に久吉が軍功を知らさん爲。時日移さず山崎にて。勝負の雌雄を決すべし。がいかにいかに。ヲ、流石の久吉よくいうたり。我も惟任將軍と勅許を請けし身の本懐。一先づ都に立歸り京洛中の者どもへ。地子

を赦すも母への追善。五の運は天王山。洞が峠に陣所を構へ。只一戦にかけ崩さん。首を洗つて觀念せよ。ホ、ホ、ホ、何さ〜。たとへ項羽が勇ありとも。我又孫吳が秘術をふるひ。地千變萬化にかけ惱まし。勝関上ぐるは瞬く内と久吉が。詞は揺がぬ大磐石。忽ち廻り小栗栖の。土に衰れを残すとは知らず知られぬ敵味方。睨み別る。コハッ二人の勇者。ナメス二世をかためた別の涙。かゝれとてし。ホ、ホ、ホ、鳥羽玉の。其黒髪をあへなくも。切拂うたる尼が崎。菩提の種と夕顔の軒にきらめく千生瓢。駒の嘶き迎ひの軍卒見渡す。沖は中國より追ひ追ひ入来る數萬の兵船。威風凛々凛然たる。眞柴が武名假名書に。うつす繪本の太功記と末の。世までも。ユリ三重へ殘しけり

同 十一日の段

同家来どもやい。彌、明日は山崎にて晴軍。時に抜目ないは久吉殿。敵方の間者。又怪しき曲者もあらんかと。此赤山與三兵衛へ密々の中付け。汝等もゆかりなく。もしや怪しき者もあらば。男女に限らず搦め取つて。本陣へ差出せよ。褒美はきつと後口に御沙汰。必ずぬかるな合點かと。地牒し合せて主従は。フシハズミ左右へこそは別れ行く。地フシ身は世を忍ぶ。笠笠に。やつ才姿も柵が。夫の詞守立し。主君の胤の音壽丸。いたはり傅き參らせて。心ならずも夜の道。オクリ流れて。傳ふ流境。フシ竝木の陰に。立ち休らひ。詞ナウ和子。遙かの西に旗の手の。月に映じてきらめくは。山崎の御本陣。父上の御座所。地妾が夫政道殿も主君の御供。翌は早々光秀様に御對面。お

嬉しうござりますかえ。同ア、嬉しい嬉しい。早うお父様に逢ひたいけれど。どろやら眠たい〜と。地詞のうちに。フシふら〜眠り。同ア、お道理でござります。大切の密事を受けた俄の旅立ち。もしや敵の間者に合ひ。御身の御難儀ありもやせんと。心は千々に誰あらう。地江州丹州兩國の御主。今では四海の御大將。惟任將軍の御公達。あまたの從者引きかへて。從ふ者はこの柵。杖柱とも思召す。御心根がおいとしほい。是といふのも父上の道に背きし御企て。たとへ望みは叶うても。勿體ない御主君の。春長様に刃を合し。主殺しの大罪と。世の口の端に情ない。それに連れたる我が夫も。俱に汚名を下すかと。思へば悲しい悲しいと人目なければ聲上げて。わつとばかりに伏沈む心ぞ。思ひやられたり立戻りたる赤山がそれと見るより相圖の呼

子。友呼ぶ千鳥ばら〜と。顯はれ出でし以前の組子。同女め遣らぬと追つ取巻く。地驚きながらさすがの柵。音壽を圍うてすつくと立ち。同ヤア心得ぬ人々の舉動。何者なるぞと咎むれば。赤山は大口あきヤア何者とは舌長し。主殺しの光秀が一子音壽丸。軍の幸先久吉公へ差出す。早く渡せと罵つたり。ホ、ホ、事可笑しや。光秀公の御内にて。人も知つたる松田太郎左衛門が女房柵。主なしの久吉殿。それに随ふそち達が。及ばぬ事と言はせも立てず。ソレ者どもと赤山が。下知に従ひ一度に。切つてかゝるを事ともせず。右と左に。三重へ雜立つれば。地口程にもなき雜人原むら〜ばつと逃散つたり。隙を窺ひ後より。切返む赤山さそくの柵。ひらりとかはせば赤山が。首は前にぞ。フシ落ちにけり。サア〜〜此際に音壽様。此場を早うと。

かひなくしく忠義一途の女氣に。主君の若を伴ひて。定めなく短夜に。心。せかれて三重へ辿り行く

同 十二日の段

誰を戀ふ。フシカ、リ鳴くや梢に。唐衣ほつてふ蟬の音を友と。地世を厭うたる浪人の風雅を好む一構へ。フシ谷の流れも水無月の。オトリ空半ばなる。フシ夕暮れ時遠寺の鐘のかうくと。豫ての願ひあり磯海。長地深き思ひに柵が縁に寄邊の舅の住家そこ爰と辿りくる。長崎稚子連れて夜の道。漸う尋ねあたりにも。家居なければ爰ならんと。フシ柴の軒端に佇みて。詞イヤなう音壽様。夫松田太郎左衛門殿の指圖を請けて來事は來ても。つひに是迄音信もせぬ親御の所。どうやら敷居が高うなり。入りにくう思ひますと。地いへば音壽が打ち點頭き。詞そな

たが得入らずは俺から先へ入つてやらうと。地の頭是も。フシ上り口。ア、コレ申しを機にして。はひる物音。何やらんと。納戸を出づる妻の眞弓。顔見合はして柵が手をもぢくと。詞ホ、ハ、ハ、ほんに私とした事が。いかに舅君の所ぢやとて案内なしに不作法千萬。お救しなされて下さりませと。地いへど此方は不審顔。詞夜に入つて若い女中の子供をつれ。舅の所へ來たとは。此母は覺えはござらぬ。成程々々委細の譯を申さねば。さう思し召すも理りながら。私事は十三の時家出致されました。御子息宗太郎殿の女房柵と申す者。夫も今は厭きとした侍。名も改めて松田太郎左衛門と申しまして。それはく連れぬ武士。どうぞこれ迄の事は川へ流し。元の親子に。ヲ、そりや云はしやれいでも知れた事。元より氣に違うて家出したと云ふでもなし。生れ

付いて力強。草深い住居をきらひ。我と我が手に家出した宗太郎。わしは明暮れ焦れて居ます。そして連れてわせたは夫婦の中に出來た子か。地マア、此方へと嬉しさの。子には目のない母親が。フシカ、リ悦ぶ中へ宗左衛門。刀片手に歩み出で。詞お婆何をべりくお言やるぞ。親を見捨てた不孝の悴。それに連添ふ此女郎嫁なんぞとは穢らしい。地早や立ち歸れとつかうどに。いふを押へて。詞ア、コレそれは一途な思ひ様。毎日々々壁訴訟。願ひの折も幸ひと。地始めて逢うた嫁の手前。どうぞ了簡し中直りして下されと。フシいふも涙の種ならん。詞エ、又してもく役に立たぬ悴が訴訟。も世間の笑ひ。暇の代りぢや向後物は言はんずく。早く奥へお行きやれと。地常の氣質の情剛に。詞はなくてしをくと

心。オクリへ残して立つて入る。地色柵は
氣の毒の中に願ひも盲兼ねて。俄に作
る。フシ輕薄笑ひ。同ホ、、ほんにま

あよしない事から御夫婦のお諍ひ。もう
お腹立ち重々の御尤もちやがどうぞ夫
の願ひ。則ち此子は主人と仰ぐ光秀公の
御公達音壽丸様。地色それに付いての御訴
訟と何か様子は白紙に。書き認めし願ひ
の一書。フシ男の前にさし置けは。地色さ
すが骨肉同胞の我が子の手跡と澁々なが
ら。手に取上げて押開けば。様子いかゞ
と氣遣ふ嫁。舅は猶も眉を撃めつぶく
讀むも口の中。卷納めてにつこと笑ひ。同
何事ならんと思ひしに。少しばかりは侍
臭い所もまり出かすく。そんなら夫の
お願ひと申しますは。成程大切の密事。
其方は知るまいく。悴が我への願ひと
いふはコ、此小兒。光秀此度當山崎に於
て。合戦の挑むといへども無名の軍。元

より主殺しといふ大罪。天何ぞこれを赦
さん然らば十が九つ負軍と推量つたる悴
太郎。さるによつて。光秀が一子音壽丸

我に養育を頼み。成長の後は出家ともな
しくれよとの願書また柵事は敵方森尾茂
助が妹に候へばこれも親が手より返し遣
しくれよとある悴が文面と聞いて悔り柵
は膝摺寄つて。同ム、スリヤ主君の若殿
お預け申さん其爲にお詫びの使一つには
私が身の上兄様へ返してくれとは何の
事。さういふ事とは露知らず舅御様へお
詫びして。嫁よ如何せい斯うせいのお詞
受けて歸りなば。夫の悦び此身の手柄と
悦んでゐるものを科もない身を去らうと
は。聞えぬ夫の心やと。スエテ口説き歎く
ぞ道理なり。同ハテさて何も歎くにや及
ばぬ此宗左衛門も元は武士。亂れたる世
を通れ。心を澄す茶道の楽しみ。折々は
久吉殿の招きに預り咄の伽。弓も引き方

眞柴へ心通はず某。大惡無道の光秀が種
とあれば願うてもないよき得物。首打放
し久吉公へ獻するならばさぞ悦び。ハテ
飛んで火に入る夏の虫とは是ならんと。
地男の一言柵が聞くより又も二度悔り。

同ほんにく親子とて餘りな情知らず獵
人さへ懐へ入る鳥は助けけるものとへ此
身は去られても。夫に立つる心の潔白女
でこそあれ松田が女房。主人の若殿滅多
にお首は得渡さぬ。斯ういふ内に片時も
置きます事はなりません。申し若殿様。
地いさせ給へと立寄るを。突退けく
音壽丸小脇に引抱きはつたと脱み。同ヤ
ア龍の腮にかゝりし小悴。連歸らんとは
叶はぬ事。悪く妨げひろぐや否や。身の
爲にならぬがや。ヲ、元より夫に去られ
し此身。生きて詮なき我が命。ちつとも
厭はぬく。地又立掛かるをシヤ面倒
なと眞の當て嘔と倒るゝ其隙に奥の間さ

して、ッシ、駈け入つたり。跡には一人櫓が苦痛堪へて起直り。阿チエ、胴欲とも惨いとも何に譬へん勇君。地何辨へも七つ子のお首を敵に渡さうとは。心は鬼か蛇かいのう。たとへ此身はひしくほに成るとても。取返さいで置くべきかと。心を配る縁先に。落散る一書は夫の手跡。

阿柵殿へ光高より。スリヤ最前の文の中に封じ込めたる此一書心ならずと封押切り。阿書残す一書の事。ヤア／＼そんなら夫太郎左衛門殿は討死の覺悟であつたか。ハア。何にもせよと又取上げ。ナニナニ今度の合戦主君光秀公主殺しといふ悪名。其罪通るゝ事あるまじく覺え候故其方を頼み親人へ若殿の儀くれ／＼相頼む事に候。又々明朝の戦ひに向ひ候敵は其方が兄森尾茂助春久に候よし。元より討死の覺悟に候へば。我等が首は春久へ遣はし候。なれ其妹の縁につれ。用捨も

候はゞ武門の中恥づべき事に候へば是非なく暇遣はし候段。必ず恨みあるまじく候と。地讀みも終らず立上り。阿こりや斯うしては居られぬわいのう。夫の最期は此曉。若殿の御身の上奥へ踏み取返さうかイヤ／＼。あれ／＼あの鐘は八つの鐘。天王山へは一里の餘。夫の命も助けたし。地こりやマアどうせう／＼と。主と夫の身の上を。我が身一人に櫓が。立つたり居たり詮方も。涙ながらに氣を取直し。阿何にもせよこれより直に天王山へ駈付けて夫に一言さうぢや／＼と。帯引締め。常には弱き女氣も夫に立つる真心の。曇らぬ鏡照る月に照らす道筋逸散にこけつ轉びつ。三軍へ慕ひ行

鎗を削る其折しも。夫の生死いかゞぞと。氣は張弓の女房櫓。武家の育ちの甲斐々々しく。夫を思ふ一心に。木の根岩角厭ひなく登る。嶮岨も力草。足踏みしめて難なくも。此方の岡に響登り。それと見るより分入つて。マア／＼待つても身を惜まず。支ゆる女房突退けて。猶も付入る太郎左衛門。互に劣らぬ勇將猛將。中にうろ／＼詮方も。渚の小舟櫓が。ッシ浪に漂ふ其風情。地色心も切に有合ふ櫓。切結びたる白刃のしづ。しつかととどめ。阿マア／＼待つて下さんせ。コレ兄様茂介殿。必ず早まつて下さんすな。もとより知れた敵味方。討ち討たるゝは武士の身の常とは知つて居ますれど。地相手も多にに姫同士。切つちはつつの争ひを。何と見捨て置かれうぞ。思ひ止つて／＼と。歎き響つを耳にもかけず。阿ヤア義晴何を猶豫。内證の縁は

縁。親子兄弟敵々。鎬を削るは武門の常。早く勝負を決せよと。地云はせも果てすにつこと笑ひ。同死人同然の政道わが相手には不足なり。光秀が先途を見届け死ぬると遅かるまじ。妹が止むるを幸ひ。此場を早く退けと。地聞くよりくわつと急立ち。同ヤア奇怪なる一言。弓矢取つては誰に恥づべき事やあらん。女房が兄とはいはさぬ。首討ち取つては修羅の奴となしくれんに。死人同然とは案外なりと居丈高。イヤモ如何様に陳ずるとも。死色を顯はす汝が骨格。我に討たれん心の覺悟。死人といひしが誤りかと。地明察遠はぬ一言は。胸に盤石現とも。心は闇の柵が。聲も涙に掻き曇り。様あの心ならどの様に思はしやんしても。所詮死なれぬお前の命。どうぞ死なずに済む事なら。千年も。萬年も長生きして。二人の中の。サア二人が中に預か

つた。地主人のお崩音様様の。行末も御無事な様に思案して下さりませコレ申し。夫婦となつて以來に願ひといふは是一つ聞届けて給へ我が夫と。妹が歎きさすがにも。血脈の糸の亂れ口。涙吞込む義晴が。ッ心の内ぞ切なけれ。同何思ひけん太郎左衛門。鏝脱ぎ捨てどつかと坐し。同實にや名將の下に弱兵なしと。連れ眼力森尾義晴。主家の無道を見限りて。死出三途の先陣と。覺悟極めし心は鐵石。死後に頼むは此女。地色又これ迄音信せざれども。實父松田利休殿へ。預け置いたるか若殿。同心を添へてよき様に。頼み置くは貴殿一人。最早浮世に望なし急ぎ首討ち我が存心。立てさしくるも武士の情。猶豫は却て恨むぞと。地いふより早く持つたる刀腹にがはと突立つれば。なう悲しやと取緋り。歎く女房を取つて引据ゑ。同サア森尾。名もなき士卒の手

に掛けんより。武士の情に我が首を。受取りくれよと差付ければ。ハ、世の有様とは言ひながら。地かばかり惜しき弓取も。主家の悪事は其身の不幸。残念至極と義晴が。是非も涙に立廻れば。ヤア愚か。死に臨むは勇者の本義。骸は廣野に曝すとも。名は千歳に留まるこそ。死しての悦び此上なし早く。地早くと唱名。聲は此世の別れかと。身をもむ妻を動かさず。膝に引敷く強氣の手負ひ。ッ首は前にぞ落ちにけり。地色わつとばかりに柵は。其儘死骸にいだき付き聲も惜まず泣き叫ぶ。心を察し諸袖を絞るも血筋恩愛の。ッ涙に。變りなかりける。地義晴は涙を拂ひ。同ヤア。妹。歎いて返らぬ松田が最期。遺言守るは首壽が身の上。又この首はそち持歸り。佛事もよきにと。地詞の中。麓の方にえい

えい聲。響き渡る兩陣の。ッシ入亂れたる鬨の聲。地身にぞこたゆる柵が涙ながらに亡夫の。★キしるしの篋上帯に。

包むも涙雨やさめ。ふり行く末の末までも。思ひつゞけし敵味方。兄の忠臣妹が。貞心くもり泣くくも麓の。方へ。

三重へたどり行く。短夜の。風吹拂ふ庭の面隈なき月もあはれ添へ。涙の露かいたいけに。無慚なるかや稚子の。目は泣きはらし。袖摺の。其松が枝に。ッシ絡まる。地妻の眞弓は差寄つて。詞ナウ利休殿尤も武智光秀といふ。逆賊の子とはいひながら。我が子の爲にはお主の若殿。手にかげうとは胸欲な。地どうぞお命助ける様。思案しかへて下さりませとエカ、リいへども。更に答なく。おのが好める。ッシ薄茶の手前。地稚子は座をしまめて。詞おりや侍の子ぢやによつて何ともない。早う殺して下されと。地いひ放

したる健氣さを。聞くに眞弓は堪へかねて。詞ア、さすがは武士の育てがら。聞分けよい程尙不便な。コレいぢらしうは

ござらぬか敵と味方と分登る道は二つにかはれども。同じ雲井に。照る月の分隔なき恩愛と。情の道を辨へてどうぞ命を

助けるやう。思案して給へ我が夫と。詞を盡し理をせめて。ッシ涙ながらに泣き詫おる。地色山手は修羅の攻鼓時しも遙かに衍して。松田太郎左衛門政道を森尾義晴討取つたりと。聞くより思はずすつくと立ち。スリヤ悴宗太郎は早や討死を遂げしとな。此上は生け置いて詮なき音壽。此世の暇取らせんと。地解く縛め悦んで。ッシ手そぶりする有様を。地見るに心は弱れども。四海の怨敵。根を断つて枯らす枝葉と抜放す。なう痛はしやと支ゆる眞弓。寄るを寄せじと引戻し。ッシ争ふ折も柵が。背に夫の切首を結ぶ妹脊の

別れ道輕もあらはにッシかけ戻り。地此體見るより稚子を後に圍ひマア待つてと。言はせも立てず聲荒らげ。詞ヤア此期に及び聞く事ない。悴討死せし上は天王山を取切られ。光秀が敗軍も目下妨げせずとそこ退けと。地突き刃振翳す。其手に

取付き聲震はし。詞コレ親父殿。慈悲も情も辨へながら。始めて逢うた嫁の思はく。生きとし生ける身ではなし。地先立つ老木若木の苔。どうぞ助けて進ぜて

と。涙に誠姑が。情の詞身に餘り有難涙柵が。夫の首を抱き上げ。亡き我が夫も諸共に命のお託とさし付けられ。さすが剛氣の利休も。親子の輪廻に引かされて。挽む心を取直し。じりくくと付廻す。地獄の呵責三惡道。シヤ面倒なと突退け蹴退け。エイと一聲稚首水もたまらず打落せば。二人はわつと泣き倒れスエテ正體。もなく伏沈む。詞主殺しの大

罪。報いも早き此死様。いで久吉の本陣へと。地駈出す裾を止むる嫁。はつたと蹴飛ばし駈行く向うへ許多の軍卒。高提灯に威風を照らし。靜々入來る眞柴久吉。あたり輝く陣裝束。思ひ寄りねば宗左衛門。フシ遙か退つて平伏し。詞コハぞんじ寄らざる公の御入來。只今陣所へ推參の所。願うてもなき對顔と。敬ひ深く相述べれば。地久吉莞爾と打笑みて。詞逆賊光秀が一子音壽丸。足下扶助致さる由。家臣森尾が密事の注進。急ぎ討手と申すも餘り仰々しく。久吉密かに向うたり。いかにくゝと嚴然たる。地詞に猶も恐れ入り。詞ハ、討らず手に入る武智が悴。討取つたるは某が。信義を忘れぬ豫ての交り。イザ御改め下さるべしと。地血汐を清め差し出せば。久吉とつくと實檢あり。詞父光秀も此如く。やがて討取る主君の怨敵。とは云ふものの稚き者。不便の

最期遂げたるよな。イヤナニ宗左衛門。云はば小兒の此切首。鼻木にさらすにも及ぶまじ。由縁の方へサ葬り召され。御邊への恩賞は。風雅を好める別業へ。思ひ寄つたる寸志の一品。それく者ども早やこれへと。地仰せの下に雜兵ども。フシ庭にどつさり一つの居石。詞何と宗左見られしか。亡君春長公の御自服とも思されて。お請けあらば拙者が悦び。スリヤ其石を某へ。いかにも。小袖代りの小袖石。葛蒲にも。あらぬ眞菰を引きかけし。かりの淀野の忘れぬかな。ヲ、さらば。地くゝと一禮し。従者引連れ久吉はオクリカ、リ本陣さしてフシ歸らる。地色跡見送つて宗左衛門ほつと吐く息も突詰めし女心の柵は何思ひけん表の方。駈出す戸口立切る利休ヤレ待て女。詞音壽丸が身代りに二人が中の悴を殺し。それが最期の忠義も立ち。さぞ本望であらうな

と。地聞いて悔り。詞ムウそんなら此子を初めから。あなたの孫といふ事を。ヲヲ十六年が其間。對面せざる我が悴。たとへ幾年經るとても。骨肉分けし此親が。見忘れてよいものか。音壽丸に出立たせ。連れ來りし稚子の。面さし目元鼻筋まで。悴に其體生寫し。地その時孫とは。フシ知つたるぞや。地とは云ひながら。現在の祖父が手かけ一刀の。下に消え行く不便さを。こらゆる心の四苦八苦。コリヤ。推量せよと大聲上げ。取亂したる溜涙。眠れる如き死首を。右と左に打守り。詞コリヤ悴。久々にてよく來たなア。十六年が夢の内。忠孝全き親子が最期。地ヲ、出かしをつたと一言が。夫子の爲の經陀羅尼と。有がた涙柵が。袖に露置く嘆言。詞さうしたあなたのお心と知らで恨みし不孝の罪。お赦しなされて下さりませ。ア、その訛言は此母が。

云はねばならぬ此場の時宜。地孫と我が子の死ぬるのを、それと白髪しろがみの身の因果。惨あはれい者ぢやとさげしんで、たもるなやいと、姉あねがが、詫わづらぶるも涙なみだ聞く涙。

勿體ない事おつしやつて下さりませな。

地嫁ぢまと名ばかり是迄にお宮仕へもする事か。逆様事さかさまことを見せませす。不孝ふこうの罪が恐

しい。とはいふものゝ味氣あじけない。二世と契せき

りし我が夫の。最期の場所に居ながらも止める事さへ情なさけない。いとし可愛いの千

石せき迄人も多に祖父様の。お手にかける

と親の身で連れて來事は何事ぞと。歎なげけ

ばさすが利休も。恩愛おんあい死別の憂うれき涙なみだ二つ

の首を見つ見せつ。取亂とくごしたる三人が。

涙の雨に水みづ嵩かさのいと増ふさりて淀川よどがわの堤

も。崩くずれるゝ。フシフシ如ごとくなり。地利休ぢりきゅう漸ゆるう

涙を押へ。阿倅あせが忠義ちゅうぎを立てさせんと信義しんぎを失ふ我が計はかりひ。天地を見抜みぬく久吉殿。

賜物たまひものもあるべきに。小袖こそでにかへて遣はなはす

と心得ぬ庭の居石。其上猶も不審ふしんなる

は。金葉集きんえしゅうに載せられし相模さうもが詠歌えいか。葛くず

蒲かきにも。あらぬ眞菰まごもを引きかけしと。引

きぞ煩わづらふ頼政たのりが深意しんいを取れば千石が。最

期さいごを花はなによそへし謎め。倅せが子袖こそで千石と。

心こころを込めし我への賜物たまひもの。今こそ思ひ當つ

たりと、地悟ぢごるもさすが久吉の。フシ明

智ちを感ずるばかりなり。地柵ぢさくは膝摺ひざずり寄

せ。阿スリヤ身代りといふ事を。そんな

ら孫の千石が。身代りに立てたのも。水

の泡うぶになりますかいのう。ヤアかねが

ね。敵たかを恵めぐむ寛仁かんじん大度だいど。猶も願ねがひを立て

んと思はゞ。此利休ぢりきゅうが鱧腹なまこはら一つ。必ず止

めなど、地差添ぢさそを。既に抜ぬかんとする所。

取付き歎なげきとどむる二人。フシ放はなせ、

と争まがひの。地色折ぢいろをりもこそあれ一間いっけんよ

り。阿ヤア松田宗左衛門利休殿。狼おおかみ

狽おぼへての犬いぬ死しなるか、地早ぢはやまれなと聲

をかけ。障子しょうじをさつと眞柴まぢ久吉。しづし

づと立出たてだづれば。思おもひ寄よらねど騒さわがぬ利

休りきゅう。阿ヤア犬死いぬしとは事をかしや。誠まこと眞まことの

失うしなせし某たれが既に報うらふ此切腹このせきはら。ホ、さすが

は老體らうたい。斯いかくもあらんと察させし故ゆゑ。陣所ぢんじよ

へ歸かへる體たいに見みえ。とくより忍しのび親おやひ聞

く。西國せいこくの探題たんだいたる眞柴まぢ久吉。實檢じつけん逢あげ

し光秀みつひでが一人。天地廣あまのちのひろしといへども今一

人ひととあるべきか。主君ぬしきみを弑ころせし武智ぶち光

秀ひで。それに引きかへ子息こじき政道せいどう。討死うちし遂つひげ

しは適あたれ勇者ゆうじや。地せめては死ししたる人々

の菩提ぼだいの爲ために此所こゝへ。庵いほりを結び利休りきゅう殿。

阿好あこうめる道の茶ちやを以もつて。往來わうらいの人に施ほさ

げ。死しするにまさる節義せつぎならんと、地情ぢじやう

の一句いちごは則すなはち悟ご道どう。死しをとどまつて松田

利休りきゅう。阿ハ、恵めぐみも厚あつき御ご仰おほせ。教しよへの

心こころは即すなはち菩提ぼだい。心の濁にごり墨染すみぞめの。衣ころもがはり

はコレ此居こゝ土衣どい。地ぢくもりを拂はらふ誓ちかひぞ

と誓ちかふつと押切おしきりつて。阿姿あそ心こころも變かる

世よに我われは茶道ちやうだの道廣みちひろく。孫まごが其名そのなの一字

を取り。利休を其儘に千の利休と改名し。地浮世の塵に交はるとも只本覺の佛性たらん。詞ホ、々々、天性備はる千の利休。今よりは久吉が則ち茶道の師と頼まんと。地約束かたき小袖石。庭に哀れは稚子の。涙の種か袖すり松古跡となりて末の世に。残る其名の因縁は。ッ此

時よりと知られたり。地色かゝる折しも眞柴の郎等。庭上に大息つぎ。ッ御注進と呼ばれば。詞ホ、堀本義太夫。味方の勝利はなんとく。ハア。仰せの如く備へを立て。兩陣互に鎬を削り。爰を先途と戦ふ中。地敵の勇將蟹江才藏。陣頭に躍り出で。詞味方の諸軍を手玉の如く打付け。地投付け駈廻る。其勢ひに怯ち恐れ。少したゆみて見えたる所に。詞福島の陣中より。至つて小兵の桂市兵衛。斯くと見るより飛びかゝり。地互に組み合ふ金剛力者。六尺豊かの才藏を。難な

く生捕り古今の手柄。勝つ色見する間もなく。川を隔てし筒井順慶。時分はよしと光秀が陣所を目かけ無二無三。一手になつて攻めかかれば。敵は敗亡狼狽へ騒ぎ。崩れ立つたる其虚に乗つて。追つ立てばつ詰め攻付ければ。是迄なりと光秀

も馬を飛ばして只一騎。小栗栖さして落延びしを追々駈行く味方の勝利。御歸陣あつて然るべしと。ッ悦び勇み訴ふれば。詞ヲ潔しく。イザ小栗栖へ後詰めせん。地かたぐし用意と久吉の。詞にはつと迎ひの軍兵。ッいざ御歸陣と引居ゆる。駒にゆらりと法の縁。結ぶ一世と二世の縁。切つて捨てたる亡魂の。しるしを直ぐに野邊送り。又思ひ出す。女氣に涙の袖や鎧の袖。旭に映じきらく。綺羅一天に刈取る眞柴。仁徳なりや風雅の徳。忠孝全き其徳を世々に。傳へて三重へ美映せり

同 十三日段

地神力勇者に勝たずと雖も。天遂にこれを罰す。されば武智十兵衛光秀。筒井順慶が裏切りによつて山崎の一戦破れ。漸う遁れ小栗栖の。ッ藪陰近くさしかゝれば。地追ひく。駈来る眞柴方。ソリヤ落人よ遁すなど。喚き叫んで切りかゝれば。詞シヤ猪口才な蛆虫ども。冥途の導きしてくれんと。地振りかざしたる刀の稻妻。瞬く内に先手の軍兵。十二三騎切つて落せし勇猛力。叶はぬ赦せと一同に。嵐に誘ふ端武者ども。ッシむらくばつと逸失せたり。地相人なければ光秀は太刀のいきりを冷さんと。藪の小陰に手綱を控へ。傾く運の口惜し涙。鎧の袖にはらく。降りかゝりたる夕立の。ッ空も哀れや添へぬらん。地折ふし藪の此方より。たゆみ付む光秀が鎧の

透間を見極めて。ぐつと突込む猪突鐘。
驚きながら切拂ふ。間もなく突出す竹鐘。
の。穂先は風の篠薄。なき立て突立て切
拂ひ暫し時をぞ移しける。地槽にすだく
蟬の經。手向となりし武智光秀。小手定
まらぬ竹鐘を。身の毛の如く刺通され。
流るゝ血汐に夏草を花と染めなす紅の。
田畑畔道刀を杖。躑ぼひ踏ぼふ無愆の有
様。ほつと一息撞出す鐘寂滅爲樂。コハリ
攻太鼓。修羅の迎ひの百姓ども。集り寄
つたる一むら雀又。突きかゝる上段下
段。一世の瀬戸と受流し。爰を。先途と
切防ぐ。地手練の鋒先百姓ども。叶はぬ敵
せと我先に。ハズミツシ跡をも見ずして逃げ
散つたり。地遁さじものと駆出し。心は彌
猛とはやれども身體勞れどつかと坐し。
拳貫く無念の齒がみ弱る心を取直し。
一元に歸す此世の暇。地刀逆手に我が
腹へがはと突立て。ツシ引廻す。地程なく

來たる眞柴久吉。萬里に羽うつ大鷹の。
へを暫時に攻め崩し。名に近江路の湖へ
威勢は旭の昇るが如く。悠々然と歩み寄
り。詞いかに光秀主を討つたる天罰の報
いを思ひ知つたるかと。地太刀拔放し光
秀が首をはつしと打落し諸軍に向ひ聲高
く。詞ヤア〜者ども。此虚に乗つて敵
の殘黨左馬之助光俊。齋藤内藏之助が備
愚かなれ

一騎も残らず追ひ沈めん。方々來れと先
に立ち。勇み進んで凱歌の聲。籠を叩き
凱陣の。其悦びを今爰に。うつすも勳善
懲惡の端ともなれとまさな言書き納めた
る君が代の。萬々歳の壽は中々申すも

寛政十一年未七月十二日

當豐竹 兩座兼帝
東竹田

作者

近松やなぎ
近松湖水軒
近松千葉軒

The following is a list of the names of the persons who were present at the meeting held on the 15th day of June, 1944, at the residence of the undersigned, at the address of 1234 Main Street, New York City, New York.

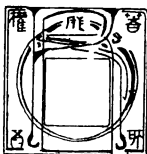
The names of the persons present are as follows:

Mr. J. Edgar Hoover
 Mr. Clegg
 Mr. Glavin
 Mr. Ladd
 Mr. Nichols
 Mr. Rosen
 Mr. Tracy
 Mr. Carson
 Mr. Egan
 Mr. Gurnea
 Mr. Hendon
 Mr. Pennington
 Mr. Quinn
 Mr. Nease
 Mr. Gandy

The undersigned, J. Edgar Hoover, Director of the Federal Bureau of Investigation, is the only person who was present at the meeting who is not a member of the Federal Bureau of Investigation.

The undersigned, J. Edgar Hoover, Director of the Federal Bureau of Investigation, is the only person who was present at the meeting who is not a member of the Federal Bureau of Investigation.

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月四日發行



日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第七卷
澤端晴名作集下
(非賣品)

編輯發行兼
印刷者

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會

代表者 石川寅吉

發行所

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會

電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

